

1. ワークショップ学生報告書

以下皇學館大学学生の報告書を掲載した。

(1) 皇學館大学 2 年 岩上奈々

八月二十四日に、図書館司書過程の講義を履修している学生対象の、愛知県田原市での図書館主催の散歩イベントに参加した。内容は、田原市福江の街を散歩するというもの。皇學館大学の学生の参加者は自分を入れて十名だった。

集合場所は、近鉄名古屋駅改札前に八時三十五分。伊勢では朝から雨が降っていたが、名古屋に着くころには晴れていたのが良かった。近鉄名古屋駅からは、豊橋行き急行に乗り、名鉄豊橋駅へ。乗り換えをし、豊橋鉄道渥美線豊橋駅から豊橋鉄道三河田原駅へ。駅から出ると、ご一緒する愛知大学の教授と学生さんが待っていてくれた。マイクロバスで旧渥美市街へ向かった。

十一時、渥美図書館（渥美文化会館）から出発。

コースは、渥美図書館→鉄道杭→畠神社→杜国公園→さくや（昼食）→潮音寺→下地常夜塔→古田の港→須賀社→余加楼、城坂→福江市民館→渥美図書館。コースのポイントで、渥美図書館の館長の豊田高宏さん、近藤めぐみさんが説明をしてくれる。

消防署を通りすぎ、空き地の隅にある鉄道杭をみた。これは「鉄道のあと」らしい。「工」という文字が刻まれていた。

次は、畠神社へ向かう。神社にいと、ほっとするような感覚になった。中は広めで、「天照皇大神宮神武天皇遥拝所」や、「学問の神様 天神社」があった。巨木名木百選に載っているといわれるイチョウの木があり、立派だった。畠神社は延喜式に載っていない神社だそうだ。私は神社へそれほど足を運んだことはないが、この神社を気に入った。

神社から数分歩いて、杜国公園へ。坪井杜国とは、松尾芭蕉の門人であるが、流罪を受けたため住まいはこれほど小さかったらしい。しかしこの街は、本当の住まいではないのだそうだ。杜国の歌が彫られた石像があり、投句箱も設けられていた。

お昼休憩。

午後からは、潮音寺を目指した歩く。十三時を少し過ぎて出発。

広々としたお寺で、藤の花が素敵だった。お坊さんが丁寧に説明をしてくれた。お寺の内装から外の建築物までじっくりと見せてもらい貴重な体験となった。潮音寺には、杜国の墓所や山口誓子ゆかりの句歌碑がある。俳句や和歌の研究者は、必ず「杜国」という人物をあたるのだそうだ。また、この地では俳句の熱があり、年に一回の杜国祭では、全国から 600 もの俳句が投稿されるのだとか。

寺についてわかったことは山号のことで、山号とは、仏教の寺院につける称号で、仏教の教えが山の如くあるという意味からきているそうだ。お話の中でも一番印象に残ったも

のは、「人々が集う場所がお寺であり、人々を気軽に迎えられるお寺にしたい」というお坊さんの言葉だ。

街歩きをして、その地にいる人の話を聞くことは興味深いことだ。渥美半島が神社領地だったというような、自分の身近なもの（ピンとくるもの）と接点があったことを発見すると、自分の世界が広がる。自分の住んでいる場所にはないであろう、下地常夜燈や火の見やぐら。どんな街でも、その地域ならではの文化があるのだとわかった。その今残っている文化や自然を、壊さず、残していったほしいと思う。良い旅だった。

この機会に、渥美で発見したものを掘り下げて調べてみて、考えを深めようと思う。

(2) 皇學館大学2年 下村有那

私がまず感じたのは、いなからしいいなかなあということ。知らない土地だけどなんとなく懐かしい空気と、海の見える景色にわくわくしました。

図書館はステンドグラスが素敵で、本棚の上の部分も可愛くて、すぐに気に入りました。羨ましくらい可愛い！児童向けのコーナーが広いのもいいなと思いました。時間の都合であまりじっくり見られなかったのが残念です。

畠神社は銀杏の木が印象に残っています。大事にされてきたんだな、という印象を受けました。

杜国公園は、俳句を入れる箱があるのが面白いと思いました。こういうものは設置してあるだけで利用されないイメージがあったので、投句する人がいることに少し驚きました。先月の優秀句が張り出されていたので、自治体の人がしっかり管理して投句してもらえるようにしているのだなと納得しました。

たくさんお話を聞かせていただいたせいかもしれませんが、潮音寺が一番心に残っています。蓮の花が咲いているのを見たのは初めてです。二千年も生きている蓮なんて、不思議な感じがします。仁王さんのお話や、たくさん野球の道具やユニフォーム、お寺が想像以上に広く部屋が多いことなど印象に残っていますが、一番いいなと思ったのは、地域の方が集まって何かをする場所でもあるということです。子どもから大人まで集まる町の施設って、素敵だなあと思います。和尚さんもとてもいい方でした。

町並みもすてきでした。海があって山があって川があって、というのは私の住む志摩と一緒にだなと思いました。風車が見える景色は志摩にはないものです。常夜燈や消防団の火の見やぐらも、福江に住んできた人たちの歴史が形として残っているようで、いいなと思いました。

今回歩いてみて、暑かったですがとても楽しかったです。どこにでもあるような町で、どこにでもありそうな風景だけど、素敵なところでした。自分の住む町も改めて歩いてみたらきっと面白いだろうな、と思いました。なんとなく通りすぎていた風景ひとつひとつにある歴史を知れば、それだけでもずいぶん違った見方になるということをしれた町歩きでした。

(3) 渥美半島歴史散歩について 皇學館大学 2 年 山下あさみ

ぱっと見た限りだといったって普通の田舎という感じだが、よく見渡してみるとちらちらと歴史的なものが見える、歴史の影がひそかに息づくところだという印象を受けた。かといって古くさい場所だというわけでもなく、歴史が残したものと現代に作られたものが合わさってデザインになっていて、町の雰囲気を作り出しているという感じだった。

鉄道杭などのように、ひっそりと目立たずにあるものもあるが、城坂や火のみやぐらのように今でもそのまま残されているものなどもあり、また、渥美図書館のやしの実号、杉浦明平の蔵書などといった地元の言い伝えや関係者の影響が見受けられ、歴史や文化を残すということを考えているのだということが伝わってきた。

町の中を歩いていると、時々色あせた木版を使っている建物を見かけ、その存在が歴史の残った町だという感覚を強くしてくれ、落ち着いたところだと感じる。また、見ず知らずの中学生があいさつしてくれて、人情のある町だなと思った。

(4) 田原市レポート 皇學館大学 2 年 堀口みあき

愛知県といえば、「名古屋」しか浮かばないような私でしたが、初めて訪れた田原市にはなぜか不思議な親近感を覚えました。私の住んでいるところは「田舎のなかの田舎」といった感じの場所なのですが、田原市の長閑な空気に何かしら共鳴したのかもしれない。

田原市の歴史に触れ、実際に街を歩いてみて思ったのは「穏やかで面白い街だなあ」ということです。田原市の街は広々として閉塞感がなく、見晴らしがとてもよかったです。海に近いこともあり開放感のある街でした。

歩いていて気づいたのですが、よくみると街の色々な場所に面白いものを見つけることができました。



- 1.街灯。すずらんのような形がかわいいです。
- 2.マンホール。地域の特色がでていて面白いです。
- 3.上流では蛍が飛ぶ免々田川。風力発電の風車が素敵でした。



また、街の歴史についても教えて頂きました。

田原市には歴史を感じさせる建物や風景などが沢山残っており、それが現在の街に溶け込んでいるところが印象的でした。見落としてしまいそうなほどでしたが、見つけたときはとても楽しくなりました。

印象的だったのは「畠神社」「火見やぐら」「常夜燈」です。



4 畠神社のイチョウの巨木。「田原の巨木・名木 100 選」に選ばれているそうです。神社と一緒にみることで、なぜか得した気分になりました。神社には伊勢との繋がりである「遥拝所」もあり、歴史を感じました。

2.「火見やぐら」は、街並みに突然表れるところが印象的でした。タワー好きなので個人的に感動しました。昔はやぐらの周りが物流の中心地で、栄えていたというエピソードに、時の流れを感じました。

3.紀行文によく登場する「常夜燈」は、実際に灯がついていたので驚きました。田原市は陸路ではなく海路が主な交通手段であったと聞き、興味をそそられました。



その他にも、芭蕉の弟子である杜国の屋敷跡や、句碑や墓の遺る「潮音寺」、福江港などさまざまな場所を見せて頂きました。芭蕉の弟子「杜国」は、今でも街で尊ばれていることが伝わってきました。「潮音寺」では、杜国だけでなく山頭火などさまざまな文人の作品を見ることができ、田原市の「文学の街」としての側面を発見しました。



1.潮音寺の句碑。山頭火のもので、「墓」の漢字のお話が面白かったです。潮音寺はこの他にも色々な見所があり、何度でも来たくなる楽しいお寺でした。

田原市は、沢山の発見が街全体に散りばめられている、魅力的な街でした。

大きな名所だけでなく、歩いた人がそれぞれの名所を見つけることができる街だったと思います。

(5) 愛知県田原市福江町 皇學館大学 2 年 山本暉通

8 月 24 日愛知県田原市福江町の名所、史跡を案内していただいた。この日訪れた場所の中で特に印象に残った二ヶ所についての感想を述べようと思う。

畠神社は「たはらの巨木・名木 100 選」に選ばれている大きなイチョウの木が一際目を引いた。幹周り約 3.2m、樹高 24.5m と、これほど大きなイチョウの木を見たのは初めてだった。この季節なので葉は緑色だったが、秋の紅葉の時期に畠神社を訪れて、葉が黄色に染まったイチョウの木を是非見てみたい。

隣江山 潮音禅寺には芭蕉の愛弟子である杜国の墓碑があり、その横には師弟山吟の碑が置かれていた。愛弟子の悲境を知った芭蕉は二十五里の道を引き返し、杜国と再会した。その時に詠まれたのが三吟の句である。そのような経緯をふまえて石碑の連句を見ると、強い師弟愛を感じることができた。

また、この潮音禅寺には多くのプロ野球選手が使い終わった野球道具を納めに来る場所でもあった。お寺と野球選手という組み合わせが面白いなと感じた。王貞治氏や長嶋茂雄氏が使っていた道具を意外な場所で見ることができて感激だった。

歩いて回れる距離のなかに、これだけ歴史的価値のある場所が固まっていることに驚いた。事前にこの街の歴史を調査してから観光に訪れれば、短い時間でも満足の観光になると思う。また、花や木、美しい海など、豊かな自然に包まれた居心地のよい街だな、と感じた。

(6) 渥美半島を訪れて 皇學館大学 2 年 稲葉梨紗

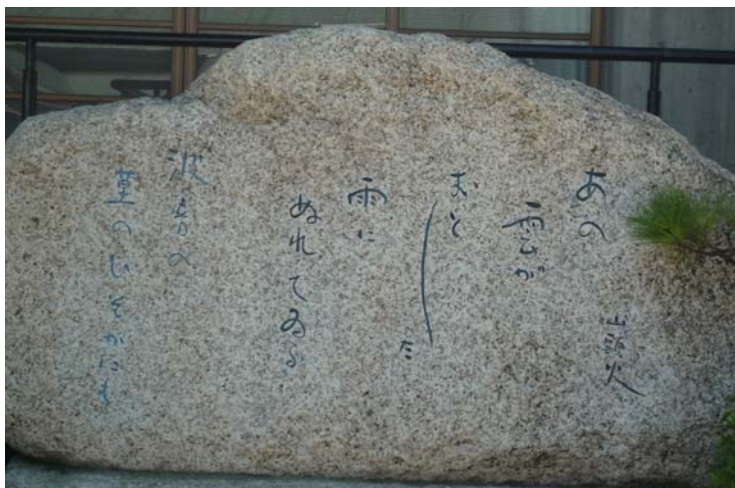
今回初めて渥美半島、田原市に行きました。行って思ったことは、いい人が多いな、と思いました。地元の子どもたちがすれ違うときに挨拶をしてくれたのはとても印象的でした。一番印象に残っているのは潮音寺の和尚さんです。自分のお寺を大切に思うだけでなく、生きているお寺＝人がたくさん出入りするお寺にしようとしているところに感銘を受けました。そのお寺には松尾芭蕉のお弟子さんであった杜国さんのお墓がありました。

杜国さんのお墓に来た種田山頭火が書いた詩の石碑もあった。

この石碑の最後の行の『墓』という字の『大』が抜けているのは、わざと間違えていて、杜国さんのお墓があまり『大きくない』と言う意味なのか、もしくは、本気で間違えているのかはわからないけれども、お墓が大きくない話は面白かったです。

杜国さんが住んでいたあたりにも行きました。

杜国さんのことは全く知らなかったけれども、松尾芭蕉のお弟子さんということもあり興味を持つことができました。



渥美半島からは、陸を使うことより、海を使う方が近かったので、海をよく使った。

ここは昔、よく使われた船着き場であった。



(7) 8 月 24 日 田原市福江の散歩の報告 皇學館大学 3 年 濱田めぐみ

のどかでどこか懐かしい雰囲気福江。すれ違う小学生や中学生が、大きな声で挨拶をしてくれる。まるでおじいちゃんの家に来たような人も町も空気も、みんな温かい。

田原市福江は、渥美半島の西部に位置している。その渥美半島は、特徴がある。全国各地の半島は、南北に延びる形になっているが、渥美半島は、東西に延びる形をしている。渥美半島に面する三河湾では、おいしい海産物がたくさん獲れる。海水のp hが違うかららしい。とくに、大あさは有名である。農産物では、キャベツやトマト、温室メロンなどが盛んである。田原市のいたるところに、ビニールハウスや畑が見られる。「イチゴ狩り」、「メロン狩り」などの看板が多く見られた。

渥美半島と言うと、柳田国男が伊良湖岬でヤシの実を拾った話が有名である。ここから日本民族南方説を唱えた。保美貝塚は円柱列になっていることなどから、南方説は説明される。島崎藤村の『椰子の実の歌』はこの椰子の実の話が元になっている。また、松尾芭蕉の愛弟子、杜国がかつて罪を得てこの地で生活し、潮音寺に墓碑が建てられ、ここで師弟三吟の句碑が完成するなど、文学や民俗学の歴史とも深く関わる土地でもある。

私が、とくに面白いと思ったのは、潮音寺だ。正式には、曹洞宗隣江山潮音禅寺という。花のお寺とも言われているようで、中でも藤と牡丹が有名で、時期になると地元の方だけでなく、遠方からも多くのお客さんが訪れる。境内には、芭蕉の愛弟子、杜国の墓があり、その横には師弟三吟の句碑があった。また、俳人山頭火や山口誓子の句碑も境内にあり、俳句愛好家の方や研究者の方も多く訪れるという。“投句箱”がここにもあった。杜国公園にあったものと同じものだ。地域住民や観光客が俳句を創り、誰でも自由に投函する。優秀な俳句は掲示される。俳人杜国にちなんで始められたものらしい。また、毎年4月に行われる、俳人杜国追善供養（杜国祭り）では、俳句を詠むという催しもある。俳句以外にも、地域住民が参加する日曜参禅会、子供会、ご詠会、和太鼓、ピアノなどの各種教室

を開き、地域文化の発信も積極的に行っている。渥美太鼓「願成観音太鼓」という子どもたちの団体は、施設慰問を始め、各種イベントに参加している。勝負の神が祀ってあるということで、有名野球選手も多数訪れており、選手の方ご自身が使用していたユニフォームやバットが飾られていた。

住職の宮本利寛さんのお話はとても面白かった。私の中の“お寺”という場所は、近くにお墓があって、お葬式や法事をするところというイメージだった。宮本さんは、例えば、京都にある寺院などで、拝観料をもらう寺院は好きじゃない、とおっしゃった。お寺は、生きた場所、つまり地域の方が自由に訪れる事が出来る場所でなければいけない、とおっしゃっていた。俳句投函箱があったり、草木を手入れしたり、法話会を開いたり、地域との繋がり、人との繋がりを大事にしていた。地域文化の発信基地としての役割を果たしていた。潮音寺のように地域の人が気軽に訪れることが出来、いろいろな年齢層の人たちがふれあえる場所が、地域にいくつもあったら素晴らしいなと思った。本堂の廊下には、催し物のときの写真がたくさん飾られていた。とてもきれいなお寺だったし、それだけ地域の方に愛されているんだと感じられ場所だった。藤や牡丹の見ごろになったら、ぜひ見に来たいと思った。福江を訪れた方には、ぜひ訪れてほしいと思った。それまでのお寺のイメージがきっと変わると思う。

福江を訪れて、町の歴史を学び、地域の方にお話を聞く機会は、本当に貴重だった。この機会を通して、私も地元の歴史を改めて勉強したいと思った。

(8) 田原・福江を歩いてみて 皇學館大学 3 年 奥野実希

福江を歩いてみて私がまず感じたのは、坂道が美しいということである。例えば、古田の港から須賀社へ向かう途中にあった、民家の間を通っていく少し急な上り坂。辺りは緑に囲まれ、歩いていてとても気持ちが良かった。角上楼から市民館へ向かう途中に通った下り坂には、左右双方から大きな木の枝が伸びあって自然のアーチを作っていて驚いた。

杜国公園に向かうまでに聞いた免々田川の蛍の話は忘れられない。話を聞いていた時は蛍もいるとは言え、そこまで多くの光を見ることはできないのではないだろうと思っていたのだが、その写真が市民館に飾ってあり、心を惹かれた。この川には蛍を見に、再度足を運んでみたいと強く感じた。

観音橋を渡ったところにある火の見やぐらは、見ることで本当に良かった。今まで映画の中でしか火の見やぐらを見たことがなかった私にとって、あのやぐらは新鮮であった。至るところのメッキがはがれて錆びており、新しく塗り替えなどはされていなかったが、寧ろそれが時代を感じさせた。

また、古田の港周辺の街並みは趣があり、良かった。民家が立ち並ぶ中にも旅館や古めかしい建物が点在している。また偶然にも、軒先にウェットスーツを吊り下げている民家を見つけることもでき、港町ならではの光景を見ることができた。

全体的に昔の面影を残す建造物が所々に残っており、まち歩きをすることで思っていた以上に様々な発見をすることができた。鉄道坑や杜国公園などはガイドに案内してもらわないと分からないとは思ったが、是非また機会があれば訪れてみたい町だと感じた。

(9) 私が見た田原市 皇學館大学 4 年 澤村 静佳

田原市を歩いてみてまず一番に感じたことは海と山がとても近いということだ。海から山のほうへ向かって歩いて行くと直ぐに急な坂道にあたる。私も海に近い土地で育ってきた人間だが平野の向こうに海が開けているため、海の直ぐ近くに坂道があることがとても新鮮だ。田原市が半島にあるということを実感させられた。

次に印象的だったのは本当にいい意味でも悪い意味でも田舎だということだ。有名な観光地があるというわけではなく、率直に言って進んで観光に行く人はかなりマニアックだ。

逆に言うと田舎の何ものなさが売りになるのが田原市だろう。イチゴ狩りやメロン狩り、海水浴やキャンプ場などがあり、都会の騒然とした景色から離れ自然を感じることを求める人にとってはとても良いところである。海に囲まれ土地であるゆえに、夏は暑すぎず、冬は寒すぎず気候もよいし、海の幸にも山の幸にも恵まれている。そして何より人柄が良く、地域づくりがしっかりしている。どちらかという、観光に来るより住むのに良いところである。

子どもたちを始め大人の人もよく挨拶をする。街中では交通量の多い横断歩道で歩行者が渡りやすいように、ボランティアの人が交通整備をしている。中でも心に強く残っているのが潮音寺の住職だ。ユーモアがあって一度会うと覚えてしまうようなインパクトのある人だが、その人の言葉が印象的だった。「京都の寺のようにお金を取って観光客に見せるような寺は本当に生きた寺ではない。地域に愛されてこそ本当の生きた寺だ。」、自分の寺や地域を誇りに思っているからこそいえる言葉である。田原は安心して住める地域というのはこういうところなのだと感じた。

実際に田原市の神社や寺、遺跡などを実際に回ってみると、文学と街の歴史の流れを感じさせられた。貝塚や古墳が残り、古く万葉から文人が訪れて歌を詠み、海上交通の要所とされた。その面影は物として残っているものもあれば消えてしまったものもあり、水の流れのように街の風景は変化していつている。田原市の職員さんに昔の町の写真を見せてもらいながら、街が歴史に息づく様を見た気がした。

今回の散歩では田原市福江町を中心に練り歩いた。三、四時間程度の散歩だったが、時間の都合上見ることができないところもあった。まだまだ見たいところ、聞きたいことがたくさん残っていて、私の中でこの散歩はまだ終わっていない。

昔、渥美半島の一部が伊勢の神宮領であったこと、伊賀出身の松尾芭蕉が渥美半島を訪れているということなど、私の地元三重ともつながりがあると聞き、田原市のことをもっと知りたいと感じた。

田原市は一見何もなさそうなところ。けれど一度嵌まると抜け出せなくなり、また来たいと思ってしまう、そんな魅力のあるところである。これがこの散歩の一番の感想である。

(10) 国文学科 4 年 田窪宏美

今回のイベントでは図書館の方が作成した資料をもとに田原市を散策しました。

私は田原市という場所について水と緑に囲まれた自然豊かな町だという印象を抱いていましたが、今回の散策で多くの史跡に触れたことで、郷土のもつ歴史を大切にする町という側面を知ることができました。

戦争の影響で敷設されなかった渥美線の名残として残った鉄道杭や芭蕉の弟子の杜国が住んでいたとされる場所にある杜国公園のほか、市街地の中にも火の見やぐらや人造石でできた擁壁などがあり、それらについても丁寧な解説をしてもらいました。

また、田原市は明るく暖かい雰囲気のある町でもありました。

散策中、何度か地域の子どもたちとすれ違いましたが、みんな元気にあいさつをしています。また、潮音寺ではお祭やイベントを通して住民同士の結びつきを深める取り組みを行っているというお話を聞くことができました。

景観や歴史も素晴らしいですが、地域の方のいきいきとした様子を見て、田原市は本当にいい街だと実感しました。

2.1 おひろめ会案内 (田原市図書館)



2.2 おひろめ会配布資料

配布資料 1

電子書籍で地域づくり！～「お散歩 e 本」おひろめ会プログラム

田原市が愛知大学に委託している田原市「お散歩 e 本」刊行実験事業の一環として、このイベントを開催いたします。電子書籍で田原の魅力を発信する実験について紹介しつつ、電子書籍をはじめとする電子メディアを地域づくりに活用する可能性とそのための課題を考えます。

※お散歩 e 本：「おさんぽいいほん」と読みます。田原市内の地域で「お散歩」のワークショップを行った結果を、「e 本」（電子書籍）によるその地域の気軽な散策のためのガイドブックとして編集しました。昨年 8 月 24 日に清田・福江の両校区で行ったワークショップの成果を 1 冊にまとめ、刊行します。今後、図書館ウェブサイト等で公開予定です。

1 日時 2 月 21 日（木）午後 1 時 30 分～午後 5 時

2 会場 田原文化会館 1 階 101 会議室（田原市田原町汐見 5 番地）

3 プログラム

13:30 開会あいさつ（豊田高広：田原市図書館）

13:40 基調講演「お散歩活動と電子メディアを活用したまちおこし」（岡野裕行：皇學館大学文学部）

14:30 実験事業の目的と概要（豊田）

14:50 「お散歩」ワークショップ報告（岡野）

15:10 「e 本（電子書籍）」制作報告（時実象一：愛知大学文学部）

15:30 休憩

15:40 討議「電子書籍が開く地域づくりの可能性と課題」（岡野、時実、満尾哲広：フルライトスペース株式会社、豊田）

16:30 質疑応答

17:00 閉会（ご希望の方は引き続き 30 分ほど、館内をご案内します。）

<ご来場の皆様へのお願い>

当イベントにおいて、記録作成のため、固定のビデオカメラ 1 台を使用し、講演・報告・討議等の模様を撮影します。その内容については、映像や文字により公開することがありますので、あらかじめご承知おきください。

平成 24 年度田原市「お散歩 e 本」刊行実験事業の目的と概要

(田原市図書館：豊田高広)

本事業は「田原市と愛知大学との連携・協力に関する協定書」に基づく、田原市と愛知大学の委託研究契約によるものである。

(1) 地域の存在価値を目に見えらるようにする。

従来省みられることの少なかった、田原市内の各地域のさりげない魅力を構成するモノやコト、その地域らしさの源となるような地域の住民の記憶などを文化資源として発掘し、一冊の電子書籍＝e (いい) 本にまとめてウェブ上に公開することによって、「ふるさと学習」の教材等として地域独自の存在価値を住民自身が再認識できるようにすると同時に、観光ガイド等として、田原市内外に発信する。

(2) 地域に密着した新たな図書館の具体的なイメージを示唆する

「お散歩 e 本」は、今後の図書館のありかたについて、貸出や閲覧による資料提供の機能に加え、人々が交流するカフェ的機能、コンテンツを編集し制作するスタジオ的機能などを複合的に有するような、具体的なイメージを示唆する。

(3) 未来の「司書」教育のモデルを提示する。

「お散歩 e 本」の制作を通じて培われる、地域の文化資源の発掘・編集・公開・活用のプロセスを遂行する能力は、これからの「司書」に求められる重要な能力となる。司書資格の取得を目指す学生や、図書館情報学の基礎を学ぶ学生に対し、ワークショップ等を通じてこのプロセスを体験させることにより、未来の「司書」教育のモデルを提示する。

(1) 業務の名称

田原市「お散歩 e 本」刊行実験事業実施業務

5. (2) 業務の実施主体

田原市（主管：図書館）が愛知大学（文学部図書館情報学専攻）に委託。

(3) 業務の内容

- ① 田原市内の一地域（実際には清田・福江両小学校区）を愛知大学と田原市図書館が協議のうえ指定し、当該地域の電子書籍版ガイドブックにまとめ、ウェブ上に公開。制作にあたっては、地域住民と愛知大学、皇學館大学の教員・学生等が参加するワークショップ（散歩、インタビュー等）を実施し、その成果を反映。
- ② 田原市内において、①の電子書籍版ガイドブックを制作する過程や、完成後において、イベント（散歩、説明会等）を実施。
- ③ ①、②の経過や成果を分析することにより、田原市における、地域に密着した新しい図書館像についての提言等を、報告書にまとめる。

配布資料 3

電子書籍で地域づくり！～「お散歩 e 本」おひろめ会アンケート

本日は、『電子書籍で地域づくり！～「お散歩 e 本」おひろめ会』にご参加いただき、ありがとうございました。今後の参考とさせていただきますので、アンケートにご協力をお願いいたします。

質問 1. お住まいを教えてください。

☐ 田原市 ☐ 豊橋市 ☐ その他 ()

質問 2. ご職業を教えてください。

☐ 図書館員 ☐ 行政職員 (図書館以外) ☐ 大学教員・学生
☐ 電子書籍・図書館関連会社員 ☐ その他 ()

質問 3. 電子書籍についてご存知でしたか？

☐ まったく知らない ☐ よく知らない ☐ ある程度知っている
☐ よく知っている

質問 4. 電子書籍を利用したことがありますか？

☐ まったく利用したことがない ☐ 利用したことはある
☐ 年に数回は利用している ☐ 月に数回は利用している
☐ 週に数回か、それ以上利用している
☐ その他 ()

質問 5. 電子書籍が読める端末を持っていますか？ (複数回答可)

☐ スマートフォン ☐ 読書専用タブレット型端末 ☐ 汎用タブレット型端末
☐ ノート型パソコン ☐ その他 ()

質問 6. 本日の催しへの感想をお聞かせください。

☐ 満足 ☐ やや満足 ☐ どちらでもない ☐ やや不満 ☐ 不満
※ 他にも感想がございましたら、ご記入ください。

質問 7. 「お散歩 e 本」の感想をお聞かせください。

☐ 満足 ☐ やや満足 ☐ どちらでもない ☐ やや不満 ☐ 不満

※ 他にも感想がございましたら、ご記入ください。

質問 8. 図書館における電子書籍の活用や、電子書籍の地域活性化への活用につきまして、ご意見や感想などがございましたら、ご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

2.3 講演スライド等

- (1)「お散歩活動と電子メディアを活用したまちおこし」（岡野裕行：皇學館大学文学部）
- (2)「お散歩」ワークショップ報告（岡野）
- (3)「e本（電子書籍）」制作報告（時実象一：愛知大学文学部）

(1)「お散歩活動と電子メディアを活用したまちおこし」(岡野裕行: 皇學館大学文学部)

お散歩活動と
電子メディアを活用した
まちおこし

2013年2月21日(木)◎田原文化会館
皇學館大学文学部国文学科
岡野 裕行

自己紹介

1977年 茨城県生まれ
2000年 図書館情報大学図書館情報学部
図書館情報学科卒業
2003年 図書館情報大学大学情報メディア研究科
情報メディア専攻修士前期課程修了
2006年 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科
図書館情報メディア専攻修士後期課程修了

自己紹介

2006～2007年 スロヴェニア共和国リュブリャナ大学
文学部アジア・アフリカ研究科日本研
究講座専任講師
2008～2010年 法政大学、群馬女子大学、鶴見大学な
どで非常勤講師
2011年～現在 皇學館大学文学部国文学科に助教とし
て赴任。主に図書館司書課程を担当

専門分野

図書館情報学
日本近現代文学

個人的な研究史①

図書館情報学を学び始める
→大学の授業とは別に個人的に文学に興味を持つ
卒論「太平治の研究をしたい」
→文学を専門にした先生のゼミで学ぶ
→退出後にキリスト教文学と書誌学に興味を持つ

個人的な研究史②

修論「三浦雄子の作家活動をまとめる研究をしたい」
→作家についての個人書誌を作成することで、文学
と図書館の接点を築く視点を育みたい
→修論のキーワードは「書誌」
→三浦雄子記念文学館で資料調査を行う
→退出後に文学館の図書館的な側面に興味を持つ

個人的な研究史③

博論「文学館を図書館の歴史のなかに位置づけたい」
→文学館の特徴をまとめることで、文学と図書館の
接点を築く視点を育みたい
→博論のキーワードは「文学館」
→文学館のお蔵物についての調査を行う
→退出後に文学資料の保存や活用のあり方について
興味を持つ

博論の提出以降

二つの流れ

内側からの問題意識

「そもそも文学資料って何だ？」
「文学資料はどこにあるのか？」



文学資料とは？

- ① 図書（初版本、全集、文庫、大系等）
- ② 雑誌、雑誌（初出誌、初出紙）
- ③ 文字資料
- ④ 手帳資料（直筆原稿、日記、書簡、メモ類）
- ⑤ 静止画資料（画、絵画、原画）
- ⑥ 音声資料（ラジオ、録音テープ、オーディオブック、Podcast）
- ⑦ 映像資料（ドラマ化、映画化、舞台化、講演）
- ⑧ 博物館資料（衣装、筆記具、身の回りの道具）



まちなかの文学資料

- ① 文学館
- ② 図書館や博物館内の文学展示コーナー
- ③ 文学碑・句碑
- ④ 作家の生家・旧居
- ⑤ 作品舞台

気づいたこと

文学資料はまちなかに
点在している

気づいたこと

文学というテーマに絡めながら図書館のことを考えていたら、いつの間にか図書館という建物の外側（まちなか）に関心が向き始めた

↓

あくまで「図書館情報学」の一部として「図書館の外側」を意識する

その結果

「まちなか」に関心が向くようになると、それを「見に行く」「足を運ぶ」という行為やイベントに関心を持つようになる

↓

図書館情報学における「地域資料」というテーマとも繋がる

その結果

図書館という施設そのものに
こだわる必要はなくなった

言い方を変えると

図書館だけを眺めているだけでは不十分

↓

図書館という「場」を飛び出そうという視点に変化した

研究テーマ

- ①文学館
- ②文学資料
- ③文学散歩
- ④まちあるき

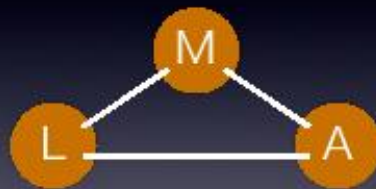
外側からの問題意識

- ①文化情報資源を取り扱う施設間の連携のあり方
- ②文学資料の活用とデジタルアーカイブ

MLA連携

博物館 (Museum)
図書館 (Library)
文書館 (Archives)

外なるMLA



内なるMLA



MLA連携に関する図書



文学館とMLA

文学館は「MLA」の全ての機能を持っている



「内なるMLA」そのもの

点在する情報資源

- ①文学に限らず、芸術作品について考える場合には、一般的に「施設」という枠組みは不要になる（施設間に境界線を引くことは無意味）
- ②必要な情報資源はさまざまな場所に点在していることを意識する

アーカイブズ学

文学資料の保存や活用を考える際には、特に「アート・アーカイブ」について学ぶ必要がある



絵画、音楽、書、彫刻、舞踊など
文学もこれに含まれる

デジタルアーカイブ

- ①資料ごとの特徴をデータの見せ方をフラットにできる（同一のレベルで扱うことができる）
- ②図書館という施設の枠組みにこだわる必要はなくなる（物理的な「場」や「空間」を越えることができる）

MALU I 連携

博物館 (Museum)
文書館 (Archives)
図書館 (Library)
大 学 (University)
産 業 (Industry)

MALU I 連携

- ①資料の保存や管理
- ②資料の保存・活用のための技術開発
- ③資料の効果的な活用方法を探る研究や教育

↓

これらの連携による相乗効果を目指す
その際のキーワードは「デジタル化」

その結果

図書館という施設そのものに
こだわる必要はなくなった

言い方を変えると

図書館だけを眺めているだけでは不十分

↓

図書館以外の施設や業界にも
目を向けることが求められた

博物館学

モバイルミュージアム



アーカイブズ学

開かれたアーカイブズ



研究テーマ

- ①MALU I 連携
- ②デジタルアーカイブの活用

デジタルアーカイブ



具体的な取り組み



伊勢ぶらり

伊勢の古地図や古写真などの
貴重な資料をタブレット端末
で気軽に見ることができる

「カレントアウェアネス・ポータル」にも掲載
図書館業界からも注目を集める
(2012年8月30日)



前例

小布施ぶらり
大垣ぶらり
神保町ぶらり
初三郎ぶらり

共同作業

三重県
伊勢市
国立情報学研究所 (NII)
ART Creative
皇学館大学

学生に求められたもの

- ①マッピングのデータ入力を担当
する (実際に試してみる)
- ②アプリを活用するまちあるきの
イベントに参加する (実際に
試してみる)

「伊勢ぶらり」の活用

まちあるきワークショップを実施

2012年9月18日





まちあるきの成果

行政（三重県と伊勢市）

→ 収集している古地図・古写真の活用

→ 地域の文化振興

→ 観光情報の提供

研究機関（国立情報学研究所）

→ 研究成果の活用

まちあるきの成果

企業（ATR-Creative）

→ 自社技術の普及と活用

教育機関（豊学館大学）

→ 最新の情報技術に触れることによる学び

→ 地域を知ることによる学び

まちあるきの成果

図書館

→ 収集対象となる資料がまちのなかにある
ことを意識するきっかけを得る

→ 地域を知るための情報提供ツール

今後の活用のアイデア

「ものがたり」を育む

① まちのものがたり

② ひとのものがたり

小布施人百選



「おぶせ まちじゅう図書館」



そのとき・その場所・そのひと
にしか存在しない
「ものがたり」
↓
いかにしてこれを形にするか

「ものがたり」を活用する
仕組みづくり

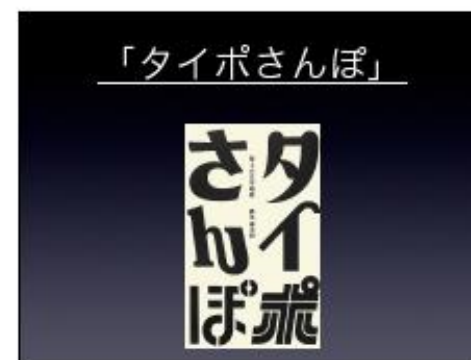
「図書館」を飛び出す

語り合う「場」をつくる
↓
ワークショップ



ワークショップの効用

身体を動かす（五感を活用する）
ことによって興味を喚起する
↓
本の世界へと繋げていく



当日のレポートを
見てみましょう

散歩は楽しい
散歩のテーマはいろいろ



「喫茶散歩」



「カフェ散歩」



「映画散歩」



「映画散歩」



「美術散歩」



「アート散歩」



「彫刻散歩」



「アトリエ散歩」



「音楽散歩」



「歴史散歩」



「写真散歩」



「スケッチ散歩」



「建築散歩」



「暗渠散歩」



「地形散歩」



「鉄道散歩」



「バス散歩」



「自転車散歩」





「お寺散歩」



「寺町散歩」



「ご利益散歩」



「文房具散歩」



「雑貨屋散歩」



「蚤の市散歩」



「商店街散歩」



「てぬぐい散歩」



「釣り散歩」



「花散歩」



「プラネタリウム散歩」



「山散歩」



「海中散歩」



「絵本散歩」



「謎解き散歩」



「ディープ散歩」



「孤独な散歩」



「霊界散歩」



「屋根裏散歩」



「ドピュッシー散歩」



「見えない散歩」



「文学散歩」



「俳句散歩」



吟行

「落語散歩」

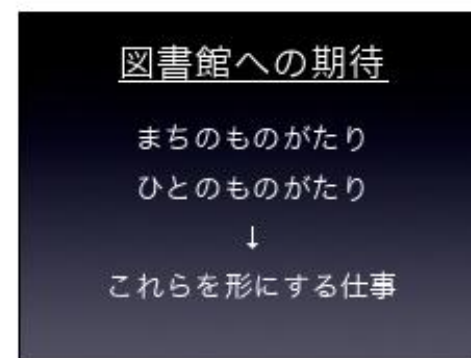
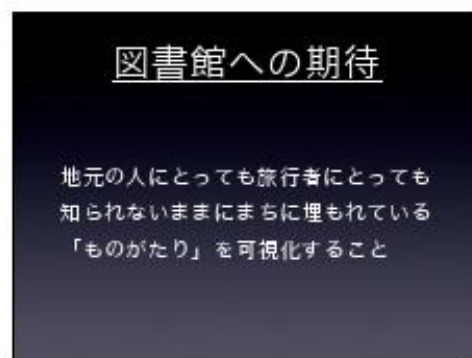
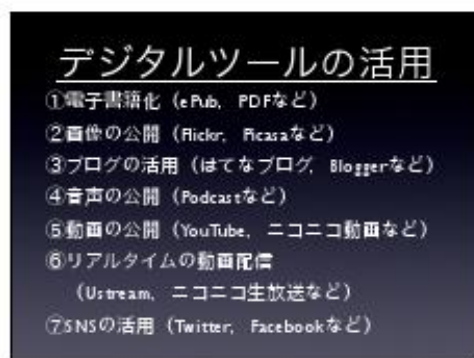
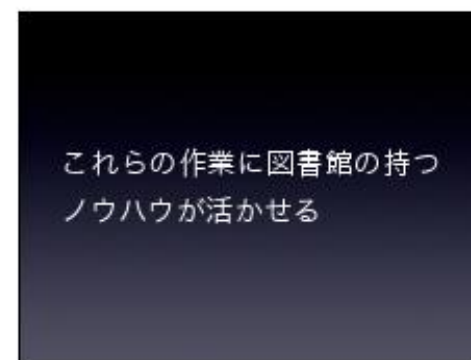
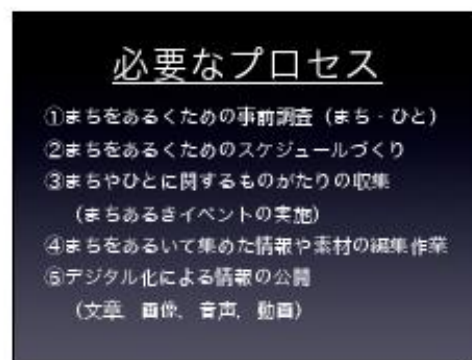
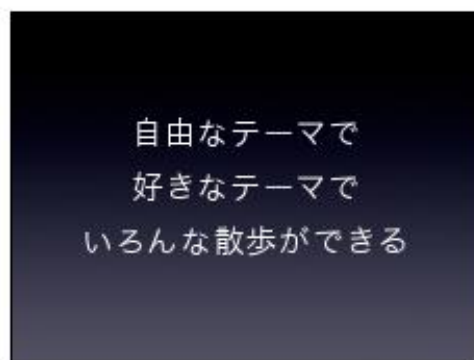


「百人一首今昔散歩」



「演劇散歩」





「ものがたり化」



(2)「お散歩」ワークショップ報告（岡野）

「お散歩」 ワークショップ報告

2013年2月21日（木）◎田原文化会館
皇學館大学文学部国文学科
岡野 裕行

ワークショップ概要

実施日付：2012年8月24日（金）
実施場所：田原市清田・福江校区
参加者数：15名

皇學館大学（教員1名・学生10名）
愛知大学（教員1名・学生1名）
田原市図書館館長（1名）
福江市民館主事（1名）

ワークショップ実施の目的

- ①皇學館大学から参加した学生は、すべて図書館司書課程を履修している者
- ②地域資料との関連で、「図書館がまちあるきのイベントに関わること」の意義を考えて欲しいと思った
- ③田原市での観光客としての目線を通して、自分の生まれ育ったまちについても考えるきっかけにしてほしかった

ワークショップの成果

- ①まちそのものや、そのまちに住む人びとが持っている何らかの「ものがたり」の存在について、関心を育めることができた
- ②公共図書館による情報収集や、集めた情報を発信することの意義について、実際にまちあるきを体験してみることで、それについて考えるためのきっかけを得られた

2012年8月24日
の朝



伊勢から



田原市へ



駅からバスで



渥美の図書館へ



まちあるきに
出発



お散歩開始



快晴！



夏！



猛暑！



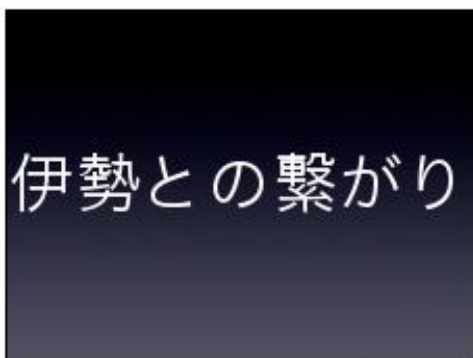
暑い！



杭







お昼！



満腹です



腹ごなしに歩く



お喋り！



お寺！



水琴観音



野球グッズ！

スポーツ選手も
お寺で修行



火の見やぐら



ひたすら歩く



海沿い！



もう一度参拝を



昔の繁華街



目的地まで
もうすぐ



歴史を知る





昔のお話を
伺う



お散歩も
おしまい



帰りのバス



帰りの電車

ぐっすり



歩き疲れました

くたびれました



お友達とも
さようなら



楽しい
お散歩でした



みんなと
仲良く伊勢まで
帰ります

報告は以上です

(3) 「e 本（電子書籍）」制作報告（時実象一：愛知大学文学部）





白炊

Prezi

国立国会図書館
蔵書電子化

Prezi

画像

Prezi



Prezi



テキスト

EPUB



画像



2.4 おひろめ会参加者アンケート調査結果

おひろめ会会場で参加者にアンケートをお願いした。その結果は次のとおりである。

質問 1. お住まいを教えてください。

田原市 (5) 豊橋市 (4) その他 (15)

質問 2. ご職業を教えてください。

図書館員 (11) 行政職員 (図書館以外) (2) 大学教員・学生 (4) 電子書籍・図書館関連会社員 (1) その他 (5)

質問 3. 電子書籍についてご存知でしたか？

まったく知らない (0) よく知らない (4) ある程度知っている (17) よく知っている (1)

質問 4. 電子書籍を利用したことがありますか？

まったく利用したことがない (1) 利用したことはある (17) 年に数回は利用している (2) 月に数回は利用している (2) 週に数回か、それ以上利用している (2) その他 (1)

質問 5. 電子書籍が読める端末を持っていますか？（複数回答可）

スマートフォン (15) 読書専用タブレット型端末 (4) 汎用タブレット型端末 (7) ノート型パソコン (16) その他 (1)

質問 6. 本日の催しへの感想をお聞かせください。

満足 (17) やや満足 (6) どちらでもない (0) やや不満 (0) 不満 (0)

質問 7. 「お散歩 8 本」の感想をお聞かせください。

満足 (10) やや満足 (11) どちらでもない (1) やや不満 (0) 不満 (0)

自由記入項目の意見は次のとおりであった。

質問 6. 本日の催しへの感想をお聞かせください。

- ・多くの学びが、私的にも、とても連動して起こっているので有意義な学びでした。
- ・新しい分野の話で興味深かった
- ・全く知らない話でしたので、とっても興味深かったです。いろいろ勉強になりました。
- ・興味深い話をありがとうございました。言葉や枠組みにとらわれてはいけないと深く思います。
- ・今後の参考になるキーワード、お話を聞かせて頂き、ありがとうございました。
- ・1つの実験についてこのようにおひろめ会をするというのはよいと思いました。
- ・参加して楽しかったです。
- ・作り手から活用まで知ることができてよかった。充実していました。
- ・図書館が外に出て活動するということに興味深く聞けました。ありがとうございました。

質問 7. 「お散歩 e 本」の感想をお聞かせください。

- ・市内にある郷土史研究会（のようなもの）、とか、田原の風などの活動との連携が必要ですね。お散歩（休けいつきの）WS をするのが良い方法だと思う
- ・今後の広がりやてんかいを考えると おもしろいかと思いました。大学との連携はおもしろいと思った。
- ・電子地図に GPS を使ったり、写真にリンク付けを行ったり、色々可能性を感じました。
- ・企画が成果、報告まで形づくったことで、成功例として、今後の参考にできると思いました。
- ・どこのまちにもそこ独自のものがあるはずなので、どこでもとりくめる余地のあるものだと思います。県立図書館などが、このようなとりくみを市町がやりやすいように、バックアップすれば、県内の図書館として大きな情報発信もできると思います。
- ・次の企画がまだないというところが残念だった。
- ・音が自動的に出るのはやめた方がいい
- ・ビデオにリンクしたり、SNS と連動していて、ちゃんと使い勝手がかんがえられていてよいと思った。
- ・学生さんがかかわっていてよかった。色いろな場面で応用がきくと思いました。
- ・この資料を、10 年 20 年と保存活用していくとなると大変だなと思いました。

質問 8. 図書館における電子書籍の活用や、電子書籍の地域活性化への活用につきまして、ご意見や感想などがございましたら、ご記入ください。

- ・連携い→連動するのには、次年度は良い時期になるはずですね。
- ・これから、つながって、発展していく分野だと思った。
- ・まずは電子書籍にとらわれすぎないことかな、と思いました。「書籍」に目をうばわれず、あらゆる情報媒体に目をむれると広がりがでるのではないのでしょうか。
- ・司書として、今後考えるべき主題であると、今回認識しました。
- ・地域資料のデジタルアーカイブや電子資料化は共通の関心事であると思いますので、ある程度のマニュアル化とその公開が出来ると良いと思います。もしそのプロジェクトが出来るとなれば協力したいと思います。
- ・田原市では電子書籍サービスをどのように展開しようと考えていらっしゃるのか期待しています。
- ・商店街との連携いで、広告をのせたり、AR でのまちなかしょうかいができるとおもしろい。
- ・デジタルアーカイブの三河部公共図書館の連携いをぜひ進めたい
- ・地域の大学と連携というのが、敷居が高いように思っておりましたが、互いの強みとメリットをうまく組み合わせてどちらにとってもよい利益のある事業であるように思いました。

・作成したコンテンツをどう多くの人々に見てもらおうのか？ それを考えるきっかけになりました。自治体や大学のホームページにアップするだけでは、閲覧者が限られてしまいます。EPUB→Bookpic, YouTube が話題にでしたが、効果的なメディア選択について、これから検討いきたいと思います。

2.5 おひろめ会についての東日新聞の記事 (2013/2/22)

③ 2月22日(金) 1993年(平成5年) 東日新聞

經濟·政治·行政

電子書籍で市内名所案内

「お散歩e本」完成

市図書館が愛大に委託

田原

田中市内の観光案内情報が載った「田中観光」が配布されている。さんぽいほん」の付属資料。同日、岡田田中の田中文化センターで、田中市図書館が愛知大学に託託る読書事業の一環で、電子メディアを生かした読書活動の、新たな図書館の役割を考察する。おかげに、田中市にある、現在、インターネット上の電子書籍閲覧サイトや、岡田市街内のタブレット端末（Tablet）で公開されている。

図書館の新たなあり方提示

事業は、田原市國
愛知大学（文学部）委託したもの。地蔵
書簡が主となり、
『書簡集』に「註」のさげない



タフレスト端で思われる「近衛歩」本「田原文化会館で」

成

委託

田原

魅力の存在価値を
注ぎ、芸術鑑賞し、地
域型国際図書館の
具體的イメージを
示していくのである。同
大は今年度中に導
引書をまとめる予
定。

(お散歩そま)氏
「国際館や別大のは
か」三浦展作助地方
の町会支援アプリ
「ほつとろい」の製
作に關わり、この學
期から製作にかか
る。

内容は、田原市内
の清田・堤川小学校
校区の福祉広場や
火の見やぐらなどの
歴史資料を観光客
学生らが訪ねると、
同地区の緑地8月に
て開設したと、得
た情報と文や写真
動画出したためた。
インターネット上の書

結核菌(サド)(b
o k p i cで見る
場合は、ミニアロ
ン(ツイスター)など
とリンクしているが
め、名指しするコ
メンと書き込んで
公開し、その情報を
取捨するところまで
ある。

国際的な電子書籍
関係の電子書籍
関係の電子書籍
「パイプ」で作った
と、ほとんどは現
水で開発できるは
ム、従来のようなハ
ームページサイトな
く、作業も、作業が
簡単にできるリッ
クにある。

同館の東山店に無
能に加えて、それ
らの情報の収集が
困難な状況下で主
題をテーマにした
動きがあること感
じる。大学での課
習を通じて、今後
図書館の力を活用
していき」と田原
市。

(お散歩そま)

2.6 おひろめ会についての中日新聞東三河版の記事 (2013/3/9)

田原市図書館が「お散歩e本」作る



田原市の渥美地区を紹介する電子書籍「お散歩e本」＝市中央図書館で

●本は、「が二〇一」と学習や観光ガイドへ
二年度予算に盛り込んだ愛知大との連携事業。同大文学部の学生と墨学館大（三重県伊勢市）の学生らが昨年八月、現地取材を重ねてまとめた。ふるさとは動画や音声も楽しめる。豊橋鉄道渥美線が渥美半島の先端部まで延伸する予定だったことを示す「鉄道航」や、昭和三十年代ごろまで繁栄した「古田の港」（福江港）など地域の歴史も紹介している。

田原市図書館は、市内の渥美地区を歩く人に、ガイドブックにはない魅力を紹介する電子書籍「お散歩e本」を制作した。図書館が電子書籍を作るのは珍しいという。豊田高広館長は「あくまで実験的な事業だが、地域に密着した新たな図書館のイメージを示しつつ、地域の価値を再認識できる」と今後の広がりを期待する。

(那須政治)

渥美紹介の電子書籍

愛大生ら取材 動画や音声も楽しめる

と話す。

e 本は、市の中央図書館にあるタブレット型多機能端末「iPad（アイパッド）」で楽しめるほか、多機能携帯電話「スマートフォン」を使って電子書籍閲覧サイト「bookpic（ブックピック）」内の「CREATORS（クリエイターズ）」のページで無料で見ることが出来る。今後は市図書館のホームページにも掲載される。

る。

原市図書館は、今回の事業を新しい図書館像の模範と位置付けているため、統編を作ることについては未定。制作に関わった愛知大の時事象一教授（図書館情報学）は「誰でも簡単に電子書籍が作れることを示させた。e本を制作することで、図書館司書に求められている地域の文化資源を掘り起こして保存する能力を養うことにつながる」と話す。

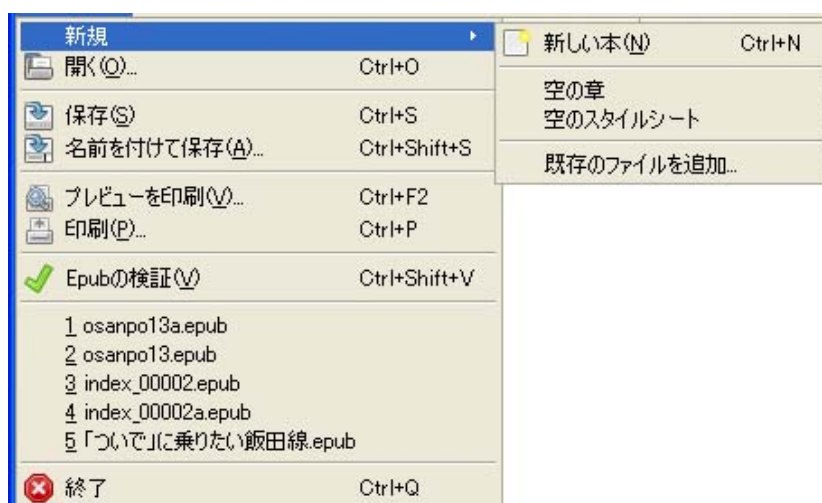
3. 電子書籍製作関係資料

3. 1. Sigil を使った EPUB の作成

「Sigil の使い方」(<http://sigil.tsukaikata.info/>) を参考とした。

(1) Sigil で作成開始

「ファイル」「新規」「新しい本」を選択して、新しい本の作成を開始する。



「ファイル」「新規」「空の章」を選択して、空の章を作成し、そこに自由に記入、またはテキストを貼り付けることができる。また「ファイル」「開く」を選択し、本文のテキストファイルを開くことができる。

この場合、コードの違いで文字化けする場合がある。そのため、コードを UTF-8 に指定し保存しておく必要がある。

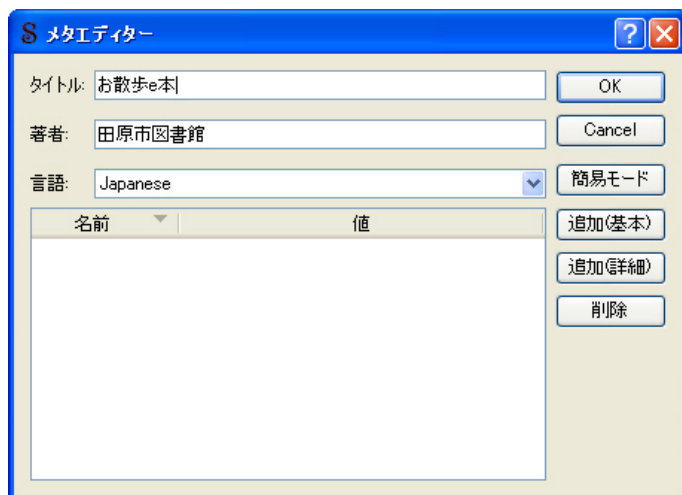


新しい章を作成するときは、「ファイル」「新規」「空の章」を選択する。

(2) メタ情報を入力する

ファイルにタイトル、著者名などの「メタ情報」を付加しておくこと、ファイルを電子書籍リーダーで読み込んだ際、作品の情報が適切に表示されるようになる。

「編集」から「メタエディター」を選択すると、タイトルや著者、言語などのメタ情報を付与する事が出来る。



(3) テキストの体裁を整える

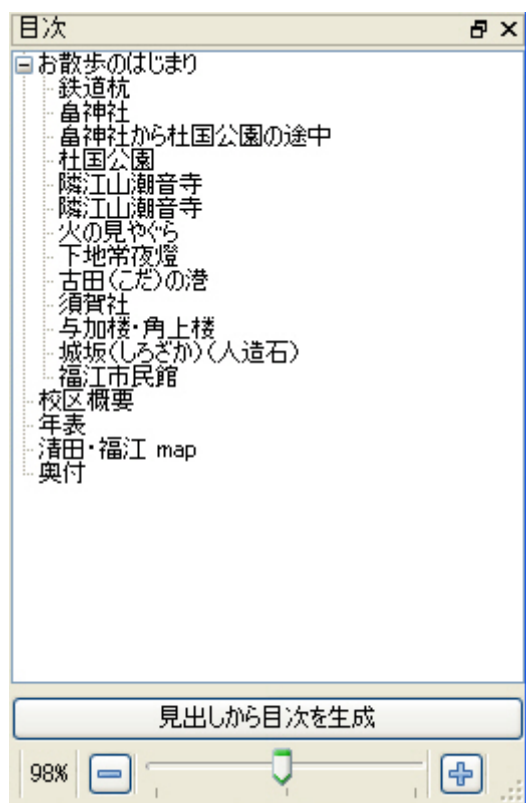
① 行を揃える

「フォーマット」から「左揃え」「中央揃え」「右揃え」「両端揃え」が選択出来る（図3-7）。



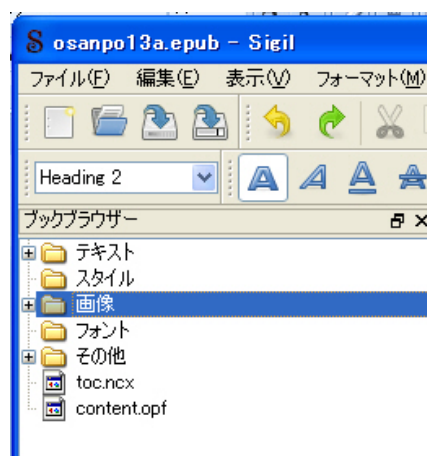
(4) 目次の作成

目次は「見出しから目次を生成」をクリックして自動的に作成することができる。ただし、見出しの設定の関係でうまくいかないことも多いので、その場合は、後述のようにテキスト・エディタで toc.ncx と config.opf を修正する。

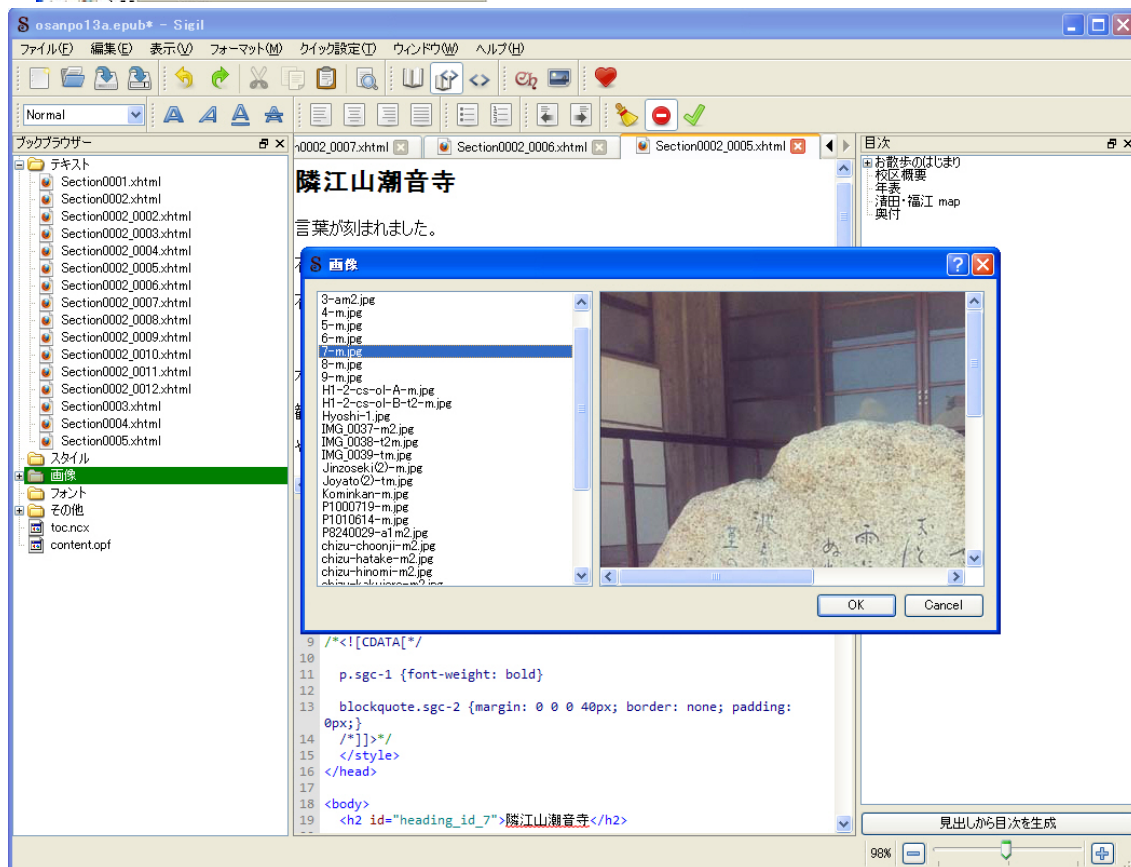
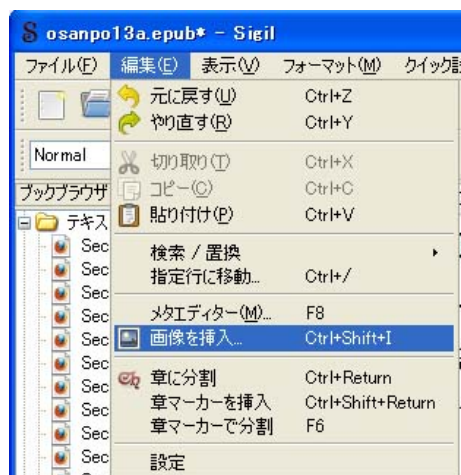


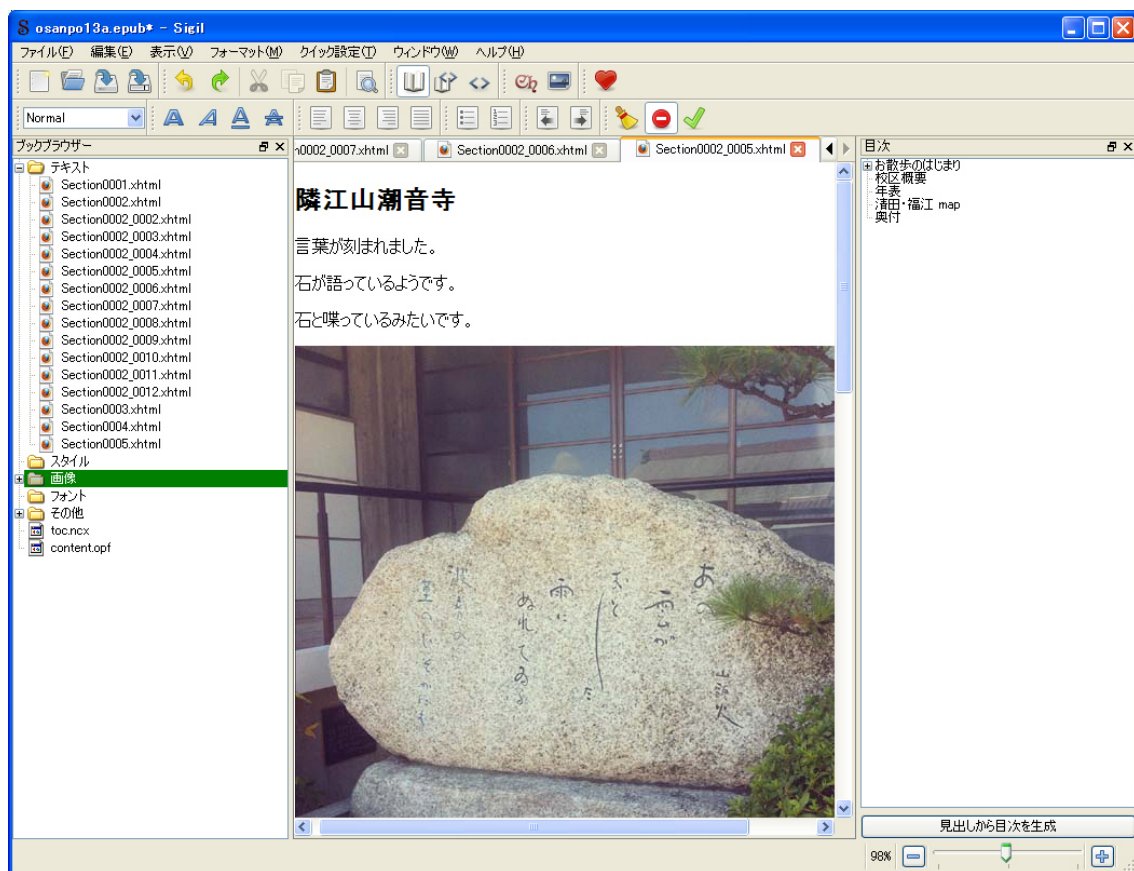
(5) 画像を挿入

まず画像を登録する必要がある。ブックブラウザーの画像フォルダを右クリックし、次に「既存のファイルを追加」を選択し、挿入する画像を画像フォルダに入れる。



画像を挿入したい部分にカーソルを合わせ、「編集」から「画像を選択」を選ぶ。挿入したい画像を選択し、「OK」を選ぶ。





3.2 テキスト・エディタを使った EPUB の編集

Sigil では、動画の貼り込みなど細かい編集ができない。その場合はテキスト・エディタを用いて手作業で編集する必要がある。用いたエディタは MIFES for Windows Ver 7.0 である。なおデータに日本語が含まれるので、エディタのコードは UTF-8 にしておく必要がある。

実際には、まず Sigil で元になる EPUB を作成したあと、それを編集するのが簡単である。

(1) 編集手順

編集手順は次のようになる

- a. 「.epub」を「.zip」に書き換える。
- b. zip ファイルを開き、Text フォルダから編集する html ファイルを見つけ、エディタで編集する。
- c. 追加する画像は Image フォルダにコピーし、content.opf に記載する。

- d. 追加する動画は Misc フォルダにコピーし、content.opf に記載する。
- e. 目次は toc.ncx で編集する。
- f. 全ファイルを zip に戻す。
- g. 「.zip」を「.epub」に書き換える。
- h. iPad で編集結果を確認する。

(2) HTML の編集

EPUB の HTML は XHTML であるので、終了タグの記述が必須である。
 のように、終了タグを開始タグ中に同時に書き込むこともできる。

(3) 画像の貼り込み

EPUB では画像サイズは自動的にページサイズに調整されるので、特にサイズの指定は不要である。しかし縦に細長い画像は改ページによって切断されるので、避ける必要がある。記載形式は次のとおり。

```
<div>
  <br />
</div>
```

(4) 動画や音声の貼り込み

動画や音声は <video> または <audio> タグで記載する。記載例は次のとおり。

```
<div><video src="../../Misc/YouTube.mp4" width="240" height="180" autoplay="false"
  loop="false" controls="true"></video>
</div>
```

```
<div><audio src="../../Misc/YouTube.mp3" width="240" height="180"
  autoplay="false" loop="false" controls="true"></audio>
</div>
```

(5) 強制改ページ

強制改ページが必要な際は次のように記載する。

```
<h2 id="heading_id_12" style="page-break-before: always">下地常夜燈</h2>
```

(6) content.opf の編集: <manifest>

content.opf ファイルの <manifest> タグでは、その電子書籍で使用するすべてのファイルを記述する。記述例は次のとおり。

```
<item href="Text/Section0002_0008.xhtml" id="Section0002_0008.xhtml"
      media-type="application/xhtml+xml" />
<item href="Images/map-3-m2.jpg" id="map-3-m2.jpg" media-type="image/jpeg" />
<item href="Misc/HatakeJinja-3-a.mp4" id="HatakeJinja-3-a.mp4"
      media-type="text/plain" />
```

(7) html ファイル表示順序

電子書籍の html ファイルの表示順序は toc.ncx で決められる。各単位は <navPoint> で記述され、ネスティングも可能である。<text> は目次に記載されるテキストである。playOrder は表示の順序である。

```
<navPoint id="navPoint-2" playOrder="2">
  <navLabel>
    <text>鉄道杭</text>
  </navLabel>
  <content src="Text/Section0002.xhtml#heading_id_2" />
</navPoint>
```

(8) 目次

目次項目の順序は content.opf の <spine toc="ncx"> で記述される。

(9) iPad 用 EPUB

iPad で正しく表示される EPUB の作り方については、<http://www.ibm.com/developerworks/jp/xml/tutorials/x-epubttut/index.html> を参考とした。content.opf で <guide> で指定されたファイルは、Mozilla Firefox では目次に正しく表示されるが、iPad では表示されなくなるので、この電子書籍では <guide> は削除した。

(10) CSS について

EPUB には default.css のような CSS ファイルが付随する。これはフォントの種類、フォントサイズや画面のレイアウトなどを指定する。ただし、今回は CSS は用いなかった。

3.3 動画の編集

(1) 撮影

撮影は Canon IXY DV2 でおこなった。記録はミニ DV カセットを用いた。

(2) 動画の編集

動画は VideoStudio 7 で編集をおこなった。元のクリップを読み込み、適宜切り張りして適切なファイルを作成した。動画では、「3 秒ルール」「4 秒ルール」などと、1 カットが長いと見ている人があきるといわれるので、なるべく短くしてつなぐようにした。

道路で自動車が走る音などが拾われているので、「編集」の音声ボタンで不要な音は削除し、編集後の音声を貼り付けた。動画は NTSC mpeg2 720 x 480 (29.97fps) で出力した。編集用の音声は「サウンドファイルを作成」で wav 出力した。

(3) 動画の変換

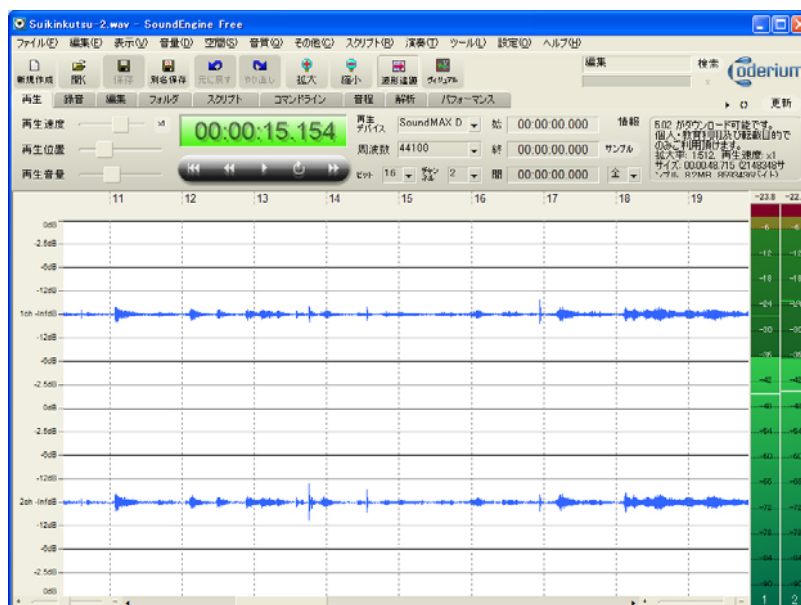
Movavi Video Converter 7.0 (フリーウェア) で wav から mpeg4 に変換した。

(4) 音声の変換

wav ファイルは、FreeMake Audio Converter (フリーウェア) で mp3 に変換した。

(5) 音声の編集

SoundEngine Free (フリーウェア) で雑音を除去、または雑音部分を削除した。自動車走行や風の音など雑音の除去は「音質」「3 バンドイコライザー」で「低音」を小さく設定することでおこなった。雑音部分の除去は、画面から不要部分を選択して削除した。



3. 4 EPUB の閲覧

(1) iPad/iPhone の iBooks

iBooks は iPad/iPhone には標準で入っているはずであるが、もしない場合は App Store から入手する。

まず EPUB ファイルを iTunes の「ブック」にドラッグする。



次に iPhone/iPad を接続して、「デバイス」に表示された機器名の「ブック」を開き、「同期」を実行すると、デバイスに EPUB がコピーされる。



デバイスで iBooks を開くと、本棚に EPUB が表示されるので、これをタップして開く。



目次は自動的には表示されないなので、左上の



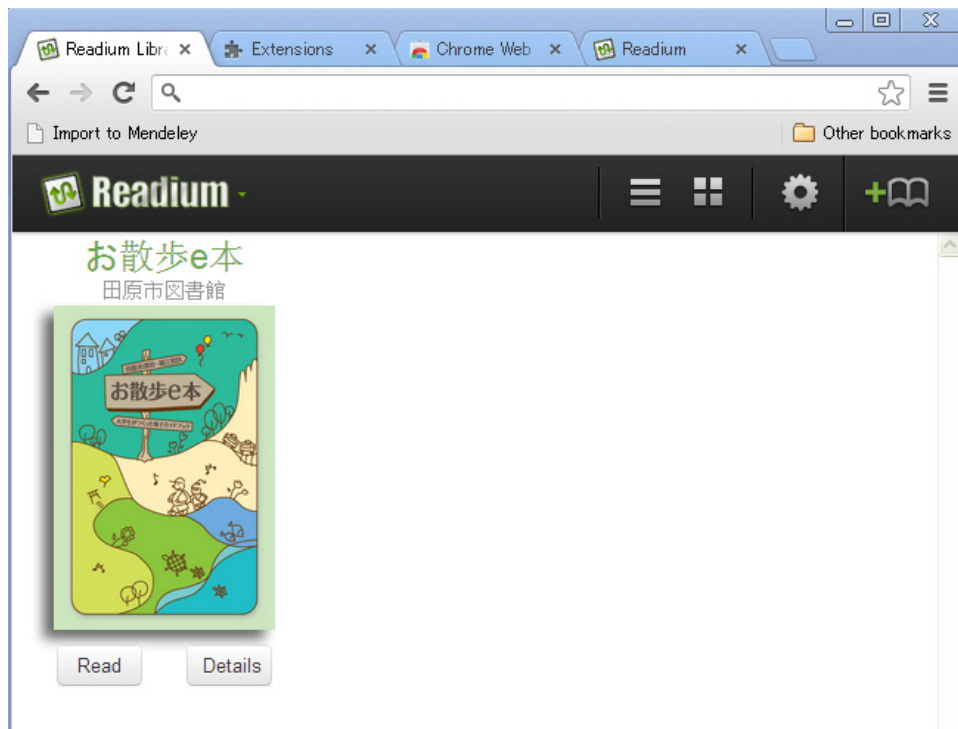
をクリックする。




(2) Google Chrome Radium

Radium は Google Chrome のアプリケーションである。Radium をインストールするには、Google Chrome の右上の三本線マークマークから「設定」を選択し、次に「拡張機能」を選択し、「ギャラリーから探しますか？」をクリックして、「Radium」と検索する。見つかったら「Chrome に追加」ボタンをクリックする
(<http://p-amateras.com/project/119/bbs/843>)。

Radium を起動すると、右上に「+本」ボタンがあるので、これをクリックして EPUB ファイルを読み込む。



ファイルを検証するため、読み込みに時間がかかる。読み込まれると本が開かれる。

メニューバーの  をクリックすると、目次が表示される。



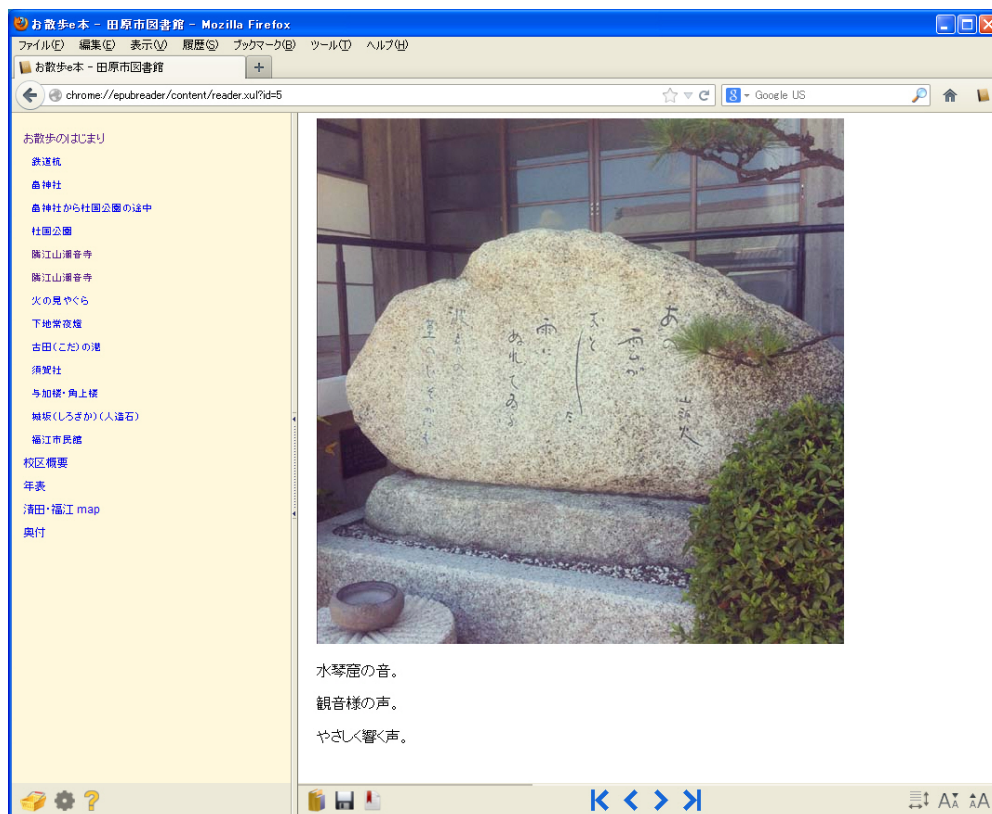
画像は画面サイズをはみ出すと切り取られてしまう。




また、今回のファイルでは、動画が作動しなかった。

(3) Firefox EPUBReader

Mozilla Firefox には EPUBReader というアドオンがある。これをインストールすると、Firefox に EPUB ファイルをドラッグするだけですぐに表示される。目次は自動的に表示される。



右下メニューの  をクリックすると、ページのサイズを画面サイズにするか、スクロール形式にするかの切り替えができる。画像はきれいに画面内に収まっている。ただし今回のファイルでは動画は表示されなかった。

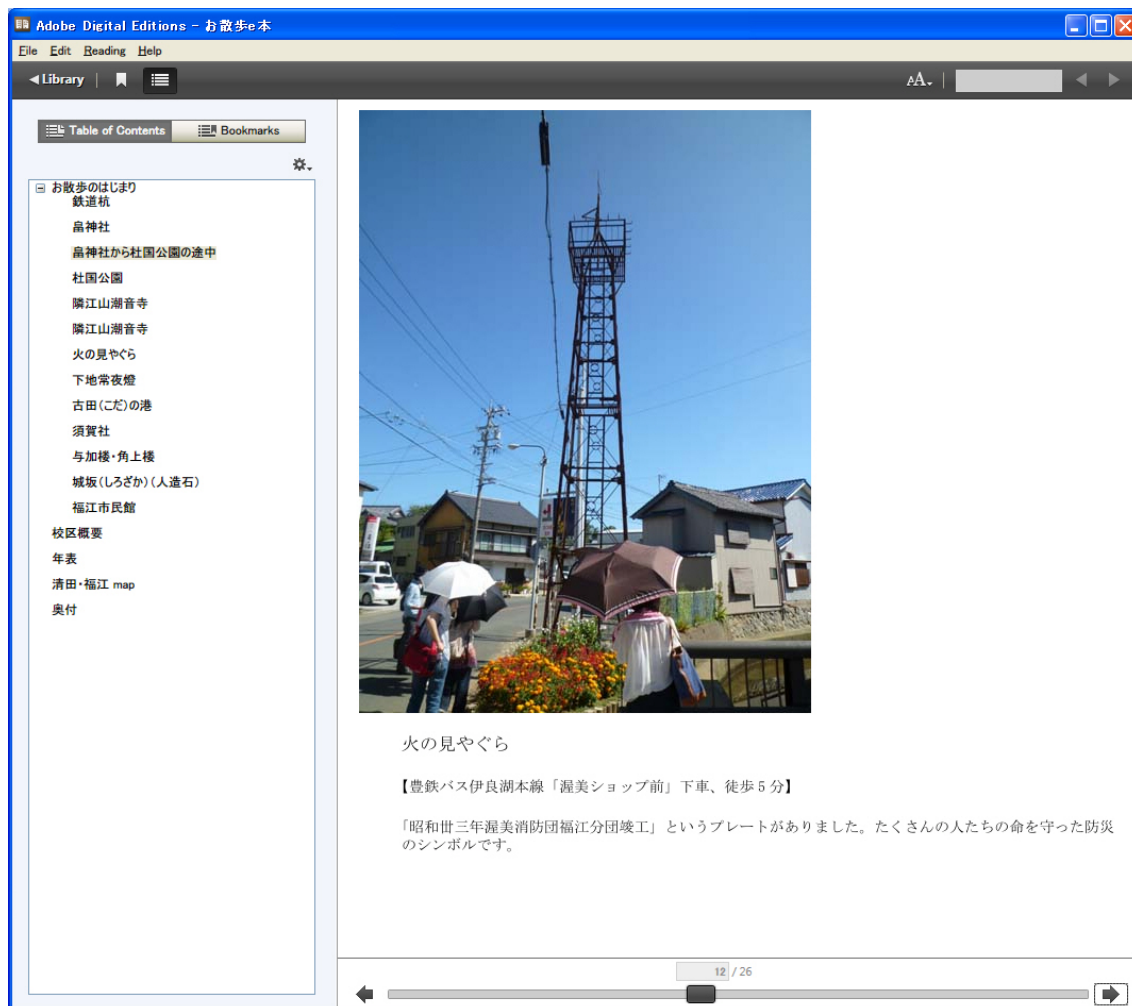
(4) Adobe Digital Editions

Adobe Digital Editions は Adobe 社が提供している電子書籍リーダーで、米国では非常に普及している。Adobe サイトからダウンロードできる (<http://www.adobe.com/products/digital-editions/download.html>)。ただし日本語版は提供されていない。

インストール後、ソフトを起動し、EPUB ファイルをドラッグするとすぐに開かれる。



をクリックすることにより目次が表示されるが、目次の項目をクリックすると、目次が消えてしまうのは不便である。



大きい画像はやはり切り取られてしまう。動画も表示されなかった。



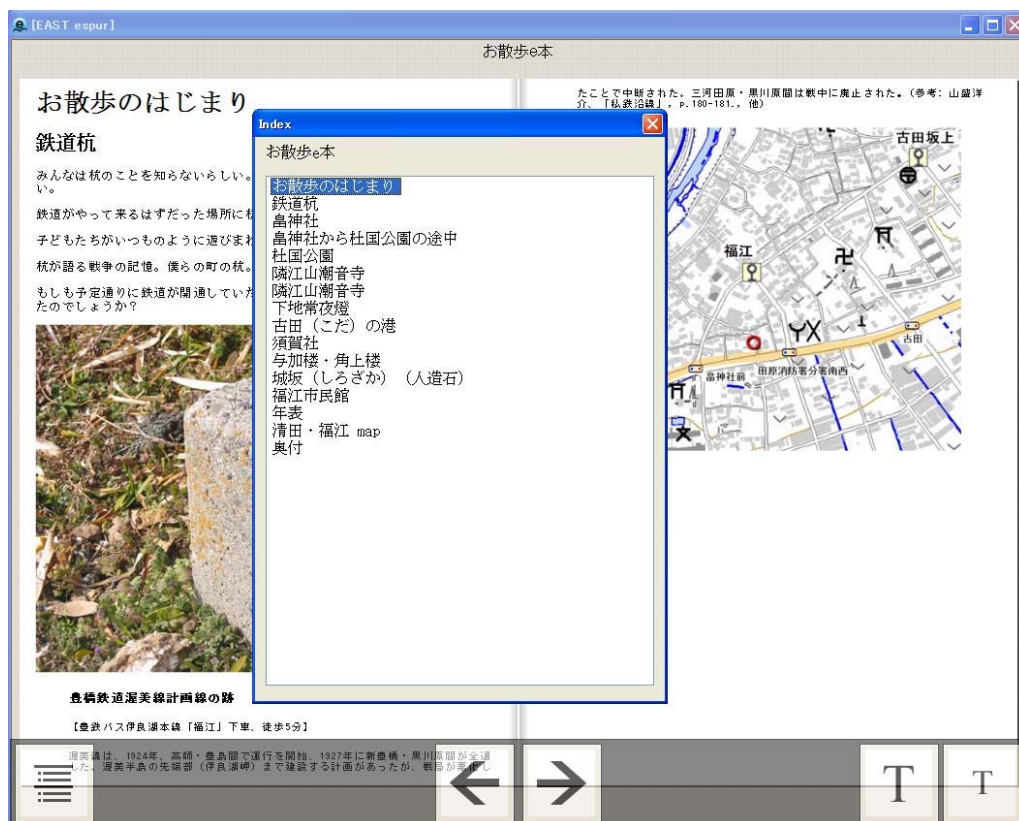
(5) espur

espur (エスパー) はイースト株式会社が提供している試作版 EPUB リーダーで、無償で提供されている。



The screenshot shows the Itoya Museum website. At the top, there is a banner image of a train. Below it, the title "豊橋鉄道渥美線計画線の跡" (Remains of the Itoya Line Watarai Line Plan Line) is displayed. Underneath the title, the text "【豊鉄バス伊良湖本線「福江」下車、徒歩5分】" (From Itoya Bus Iroko Main Line "Fukue" Station, 5 minutes walk) is shown. The main content area features a map of the Itoya Line Watarai Line Plan Line, with a list of stations on the left: 伊良湖本線 (Iroko Main Line), 福江 (Fukue), 伊良湖 (Iroko), 伊良湖本線 (Iroko Main Line), 伊良湖 (Iroko), 伊良湖本線 (Iroko Main Line), 伊良湖 (Iroko), 伊良湖本線 (Iroko Main Line), 伊良湖 (Iroko). To the right of the map, there is a text box containing the following information: "渥美線は、1924年、高師・豊島間で運行を開始。1927年に新豊橋・黒川間が全通した。渥美半島の先端部（伊良渚岬）まで建設する計画があったが、戦時が重なり、実現しなかった。" (The Watarai Line started operation between Takasaka and Toyoshima in 1924. In 1927, the new Toyoshima and Kurokawa sections were completed. There was a plan to build the line to the tip of Watarai Peninsula (Iroko Peninsula), but it was not realized due to the war.) Below the text box, there are navigation buttons: a left arrow, a right arrow, a magnifying glass, and two buttons labeled "T".





(6) まとめ

今回は iPad できれいに見えることを目的に EPUB を作成したので、他のリーダーではうまく表示されなかった。特に画像の設定と動画の設定が正しくないようであるが、原因は調査しきれなかった。

3.5 bookpic への登載

bookpic (<http://bookpic.net/>) は株式会社美術出版ネットワークス社が提供する電子書籍サイトで、有料の書籍を販売する「BOOKS」と無料の書籍の「CREATORS」からなる。「CREATORS」サイトは当面無料で利用できる。

電子書籍を登載する場合は、まず編集ツール「bookpic editor」をダウンロードして、そこで各ページ毎の JPEG 画像を貼り付け、書籍を編集する。出来た書籍は「ファイルアップローダー」でアップロードする。

(1) ユーザ登録

まずユーザ登録をおこなう。メールアドレスだけで登録できる。Twitter でログインすることもできる。

(2) bookpic editor をダウンロードしてインストール

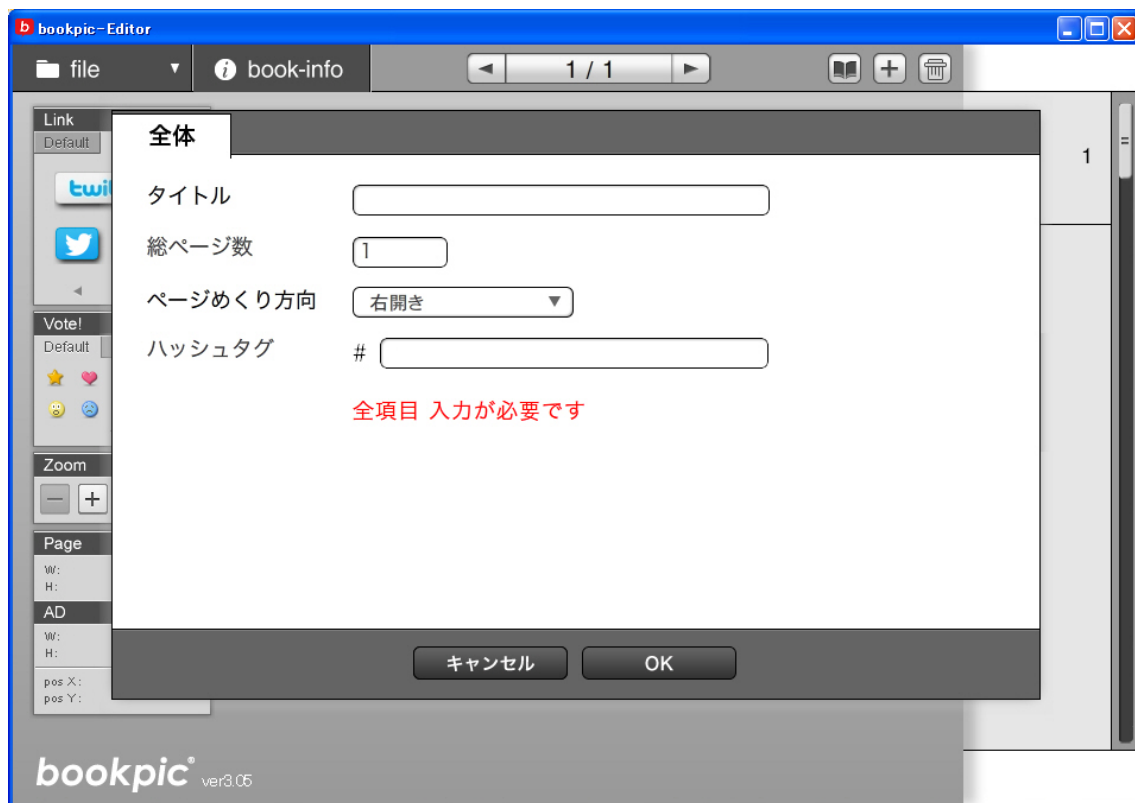
(zip ファイル中の bookpic-Editor.air を実行)



(3) 「file」「new」で新しいプロジェクトを登録



「プロジェクト」とは一冊の電子書籍になる。タイトル等を入力する必要があるが、後から変更は可能である。

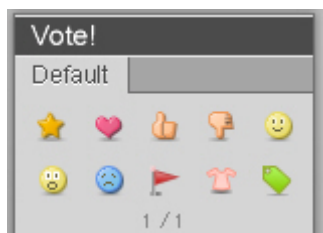


(4) jpeg ファイルを追加

JPEG ファイルはページ単位の貼り付けとなる。2 つ以上の JPEG を同一ページに貼り付けることはできない。

(5) 「いいね」 ボタンやリンクボタンを追加

「いいね」 ボタンは Vote から選択できる。



リンクボタンには、Web リンクと Movie リンクがあり、貼り付けて該当の URL を入力する。



(6) 「file」「export」でデスクトップに書き出し

ファイル名は自動的に付与される。

(7) 「file」「upload」でアップロードできる

アップロードの際は「ファイルアップローダー」を用いる。

(8) 編集

一旦アップロードした電子書籍を編集したいときは、マイページの「ファイルリスト・編集」を選択し、編集する電子書籍の「詳細」をクリックする。

マイページ

tokizane さん

- お気に入り >
- 立ち読み履歴 >
- スクラップ >
- 購入履歴 >

CREATORS
ファイルアップローダー

CREATORS
ファイルリスト・編集

home > マイページ > ファイルリスト

CREATORS

ファイルリスト (全 1件)

現在、100 MB 中 21 MBを使用しています



田原市「お散歩e本」

公開中 843125164312491

ページビュー数 2295

つぶやき数 4

ファイル容量 21MB

ビューアで確認 >>

詳細

すると、アップロード画面が表示されるので、差し替えるファイルを選択し、「この内容に変更」をクリックする。

close or Esc Key



データダウンロード

ファイルアップロード(最大50M)

No file selected

[参照](#)

カテゴリ

書籍

ページ設定 ☒ 公開 ☐ 非公開

公開範囲

bookpicに掲載する

 このファイルを削除

この内容に変更

ファイルを差し替えたとき、つぶやき等は元のページ毎に保存されているので、あるページを削除したり、追加したりするとつぶやき等の位置が狂ってしまう問題がある。

(9) アクセス

bookpic ホームページで CREATORS を選択すると、表紙のサムネイルが表示されるので、そこから読みたい本を選択できるし、書籍のタイトルで検索もできる。また各書籍には ID が振られているので、直接 URL でリンクもできる。

(10) リーダー

リーダーは図のとおりである。ページにリンクボタンが貼り付けられており、また「つぶやき」や「いいね」が表示されている。



(11) 「つぶやき」と「vote」


だれでも「つぶやき」を書き込むことができる。登録してある利用者の場合はアイコンが表示される。方法は次のとおり。

? FAQ


FAQ: 基本操作

■全般


Q 自分がつぶやくにはどうしたらいいですか？

- A** ビュー画面左上にある「」ボタンがツイートボタンです。
Twitterアカウントをお持ちの方であれば、つぶやきたい誌面や画像の上をクリックまたはタッチすることでつぶやくことができます。
但し、booksに関してはパブリッシャーの判断でつぶやけないエリアがあります。

Q タイムラインを表示させるにはどうしたらいいですか？

- A** ビューア上部右側にある「」ボタンをクリックしてください。

Q つぶやきを非表示にするにはどうしたらいいですか？

- A** ビューア上部右側にある「」ボタンをクリックしてください。つぶやきの表示・非表示を制御できます。


Q Voteボタンって何ですか？

- A** 誌面についての評価を投票できるボタンです。アイコンによって意味合いは様々あり、bookpicにログインし、ボタンを押すことで、簡単に投票に参加することが出来ます。また、投票はマイページでソーシャル連携しているサービスにも展開します。

Q Voteするにはどうしたらいいの？

- A** Voteボタンのアイコンは様々あります。たとえば  1 の場合は左側の  をクリックすると投票が出来ますが、投票するにはログインが必要になります。

Q Voteボタンした人を見るのはどうしたらいいの？

- A** Voteしたユーザを確認するには、Voteマークの右側にある数値  を押すと見ることが出来ます。

■books

Q 以前つぶやいた自分のツイートが画面上から消えていました。

- A** 誹謗中傷、わいせつ表現、個人情報がわかるものなど利用規約の禁止事項記載のものや誌面にそぐわない内容については、出版社側及び運営者により事前の告知なく削除される場合がございます。

4. 議事録等

- (1) 第 1 回打ち合わせ
- (2) 第 2 回打ち合わせ
- (3) 「お散歩 e 本」福江地区追加取材報告
- (4) 「電子書籍で地域づくり！～「お散歩 e 本」おひろめ会」記録

議事録等 1

第 1 回田原市「お散歩 e 本」担当者打ち合わせ議事録

日時: 2012 年 8 月 7 日 (火) 15:30-17:00
 場所: 愛知大学研究館第 4 会議室
 参加者: 愛知大学 時実 象一、山本 昭
 田原市図書館 豊田 高広
 皇學館大學 岡野 裕行

配布資料

- 委託研究契約書 (平成 24 年 7 月 26 日)
- 御見積書 (2012 年 7 月 17 日)
- 福江地区活性化ビジョン策定業務報告書 (田原市 平成 19 年 6 月) (CD)

議事概要

1. ワークショップについて

2012/8/24 に予定しているワークショップについて検討した。

(1) スケジュール

下記のとおり。

時刻	工程	備考
6:41	伊勢発	近鉄、名鉄経由
9:26	豊橋発	豊橋鉄道経由
10:20	三河田原着	
10:30	三河田原発	マイクロバス
11:00	渥美着	
	前半ワークショップ	渥美地区
12:00	昼食	場所未定
13:00	後半ワークショップ	渥美地区
15:00	インタビュー	渥美図書館
16:00	渥美発	マイクロバス
16:40	三河田原発	豊橋鉄道経由
17:32	豊橋着	

17:47	豊橋発	近鉄、名鉄経由
20:09	宇治山田着	

(2) 参加者（マイクロバス乗車）

皇學館大學 11 名

愛知大学 2 名

(3) ワークショップの場所

田原市図書館で案を作成する。

(4) ワークショップでの活動

写真撮影、ビデオ撮影、メモ取り。これについては「福江地区活性化ビジョン策定業務報告書（田原市 平成 19 年 6 月）」を参考とする。インタビューでは可能なら録音機材を準備する。

2. お披露目会について

(1) 日時

2013 年 2 月 25 日の週（2/26, 3/1 は除く）を予定し、会場の都合を調べて提案する。

(2) 会場について

参加者 50 人程度とする。機材（HDMI 端子付プロジェクタ、ビデオカメラ等）とネット環境について田原図書館で調査する。

3. 電子書籍について

愛知大学で検討中であるが、EPUB 作成のめどはたった。それと並行して、ネット出版 BCCKS、bookpic などの利用も検討することとした。

4. 報告書について

特に形式はないとのことなので、前記「福江地区活性化ビジョン策定業務報告書」を参考とする。ワークショップメモ、インタビュー記録など、そのまま掲載する。

5. その他

次回打ち合わせの日時は未定であるが、9-11 月に 1 回、2 月に 1 回はおこないたい。

第 2 回田原市「お散歩 e 本」担当者打ち合わせ議事録

日時 2013 年 1 月 21 日 (月) 15:30-17:00

場所 皇學館大學岡野助教室

出席者: 愛知大学 山本 昭、時実 象一

田原市図書館 豊田 高広

皇學館大學 岡野 裕行

配付資料

- 「お散歩 e 本」デザイン (A 案、B 案)

議事概要

1. 電子書籍「お散歩 e 本」の製作について

PDF 版デザインについて検討し、A 案を採用することとした。

お披露目会に向けては、

(1) 冊子

PDF 版を元にして印刷、B5 を予定

(2) PDF 版

これは bookpic サイトに登載する

(3) EPUB 版

お披露目会当日は iPad に入れて閲覧

(4) HTML 版

オプションで作成、当日はオフラインで閲覧

その他、掲載する文章、画像について確認した。

また、出来た「お散歩 e 本」については、税金で作られたものは積極的に公開し利用を促進していく趣旨で、クリエイティブ・コモンズの「さささ」(CC-BY) で公開することとした。

2. お披露目会の式次第

次のような式次第とすることとした。

13:30 開会あいさつ (豊田)

13:40 基調講演（岡野）

「お散歩」活動と町興しについて（仮題）

14:40 「お散歩 e 本」プロジェクトの報告（各 20 分）

(1) プロジェクト概要（豊田）

(2) ワークショップ報告（岡野）

(3) 電子書籍製作報告（時実）

15:40 パネルディスカッション

(1) フルライト・スペース満尾氏からコメント

(2) ディスカッション

満尾、豊田、岡野、時実、山本

16:40 質疑応答

17:00 閉会

各自レジュメ等を適宜作成することとした。当日のネット環境、プロジェクタ環境について確認した。スライドについては報告書に添付する。また講演記録（文字起こし）について、可能かどうか検討する（時実）。

3. お披露目会に向けての準備

(1) 案内原稿の作成（豊田）

(2) 図書館関係の案内（豊田、ほか各自）

(3) メディア関係の手配（豊田）

(4) メーリングリストの案内（時実）

4. 報告書

3/15 までに作成すること（時実）。

以上

「お散歩 e 本」福江地区追加取材報告

2013/2/15

時実 象一

下記のとおり、福江地区での取材をおこなった。

日時 2013 年 2 月 14 日（レンタカー使用）

豊橋発 13:00 福江着 14:00

福江発 16:00 豊橋着 17:00

目的 「お散歩 e 本」の EPUB 版に動画および音声を追加するため、必要な撮影を行った

取材先 畠神社、杜国公園、潮音寺、古田港、須賀社

以上

「電子書籍で地域づくり！～「お散歩 e 本」おひろめ会」報告

2012/3/4

時実 象一

日時: 2013/2/21 (木)

場所: 田原市文化会館

開会挨拶 田原市中央図書館館長 豊田 高広

(1) 基調講演 皇學館大学文学部国文学科 岡野 裕行

(a) 自己紹介

岡野氏は、筑波にある旧図書館情報大学大学院情報メディア研究科で博士前期課程を修了、その後、合併によって図書館情報大学から名称が変わった筑波大学大学院図書館情報メディア研究科で2006年に博士号(学術)を取得した。その後 スロヴェニア共和国リュブリャナ大学文学部アジア・アフリカ研究科日本研究講座専任講師を1年間務め、帰国後、法政大学、相模女子大学、鶴見大学などの非常勤講師を歴任したのち、2011年に皇學館大学の助教に赴任、図書館司書課程を担当している。

専門は図書館情報学と日本近現代文学である。個人的な研究の歴史を振り返ると、まず卒業論文では「太宰治」について研究し、その後にキリスト教文学と書誌学に興味を持つようになり、修士論文は「三浦綾子の作家活動」を書誌的にまとめる研究をおこなった。その過程で三浦綾子記念文学館において資料調査をおこなったことが契機となり、博士論文は「文学館を図書館の歴史のなかに位置づけられる」との考えに至り、文学館の出版活動についての研究をおこなった。文学館は博物館の一種と見られることが多いが、実は図書館とも非常に近い存在である。

(b) 文学資料についての関心

その後も「文学資料」についての問題意識が高まり、個人サイト「文学館研究会」を2009年に立ち上げている。

文学資料は、

- ①図書(初版本, 全集, 文庫, 大活字本)
- ②雑誌, 雑誌(初出誌, 初出紙)
- ③点字資料
- ④手稿資料(直筆原稿, 日記, 書簡, メモ類)

- ⑤静止画資料（書，絵画，原画）
- ⑥音声資料（ラジオ，朗読テープ，オーディオブック，Podcast）
- ⑦映像資料（ドラマ化，映画化，舞台化，講演）
- ⑧博物資料（装身具，筆記具，身の回りの道具）

など、さまざまな形態がある。しかし、よく考えてみると、文学資料は「まちなか」にもある。たとえば、

- ①文学館
- ②図書館や博物館内の文学展示コーナー
- ③文学碑・句碑
- ④作家の生家・旧居
- ⑤作品舞台

などである。「まちなか」に関心が向くと、「見に行く」「足を運ぶ」という行為やイベントにも関心を持つようになった。その結果、「図書館」という「場」を飛び出そうという視点に変化していった。

現在の研究テーマは、

- ①文学館
- ②文学資料
- ③文学散歩
- ④まちあるき

である。

(c) 外側からの問題意識

さらに別の問題意識としては、ここ数年議論されている、「文化情報資源を取り扱う施設間の連携のあり方」と「文学資料の活用とデジタルアーカイブ」がある。前者については、しばしば博物館・図書館・文書館の「MLA 連携」が語られるが、文学館は実は内部に博物館・図書館・文書館の役割をすべて持っており、「内なる MLA」ということができる。また、文学だけでなく、芸術作品一般については「施設」という枠組みは不要となり、必要な情報資源はさまざまな場所に点在している。

一方で、文学資料の保存・活用のためには「アート・アーカイブ」の視点が必要である。デジタルアーカイブをおこなうと、さまざまな種類の資料を同一のレベルで取り扱えるようになる。したがって、施設の枠組みにこだわる必要がなくなる。

「MLA 連携」は、最近では大学 (U)・産業 (I) を加えた「MALUI 連携」と呼ばれるようになった。その際のキーワードは「デジタル化」である。そうするとますます図書館という施設にこだわる必要がなくなる。「モバイルミュージアム：行動する博物館」、「日本の公文書：開かれたアーカイブズが社会システムを支える」などの本が参考になる。

(d) 伊勢ぶらり

現在の研究テーマは「MALUI 連携」と「デジタルアーカイブの活用」である。その具体的な取り組みとして「伊勢ぶらり」というプロジェクトにかかわった。これは伊勢の古地図や古写真などの貴重な資料をタブレット端末で気軽に見ることができるようにしたものである。タブレット作成の際は、「小布施ぶらり」「大垣ぶらり」「神保町ぶらり」「初三郎ぶらり」などの前例を参考とした。

「伊勢ぶらり」は、三重県、伊勢市、国立情報学研究所（NII）、ART Creative、皇學館大学、の 5 者による共同プロジェクトである。古地図データと Google Map を結合して自分のいる場所を古地図上にマップできる。また特定の場所をタップすると、現在の写真なども見ることができる。学生にマッピングのデータ入力を担当してもらい、またアプリを活用したまちあるきイベントで実際に使ってもらった。この「まちあるきワークショップ」は 2012 年 9 月 18 日と 11 月 18 日に実施した。

「まちあるき」の成果としては、行政（三重県と伊勢市）としては、収蔵している古地図・古写真の活用、地域の文化振興、観光情報の提供、などがあり、他の機関にもそれぞれに成果があった。

今後の活用のアイデアとしては、それぞれのまちについての「ものがたり」を育むというものがある。対象は「まち」と「ひと」である。先例としては「小布施人百選」という取り組みがある。また、あるとき、ある場所、あるひとにしか存在しない「ものがたり」がある。これを形にしようとする試みの事例として、「川口市メディアセブン」が行っているようなワークショップの活用が考えられる。

(e) 「さんぽ」を通しての「ものがたり化」

ワークショップの効用は、「身体を動かす（五感を活用する）ことによって興味を喚起する」という点にあり、これを本の世界へと繋げていくことを考えている。そのキーワードが「さんぽ」である。現在さまざまな「さんぽ」の本がある。例としては、「タイポさんぽ」「読書散歩」「喫茶散歩」「カフェ散歩」「映画散歩」「美術散歩」「アート散歩」「彫刻散歩」「アトリエ散歩」「音楽散歩」「歴史散歩」「写真散歩」「スケッチ散歩」「建築散歩」「暗渠散歩」「地形散歩」「鉄道散歩」「バス散歩」「自転車散歩」「食散歩」「ごはん散歩」「うどん散歩」「そば散歩」「カレー散歩」「和菓子散歩」「たい焼き散歩」「散歩酒」「神社散歩」「お寺散歩」「寺町散歩」「ご利益散歩」「文房具散歩」「雑貨屋散歩」「蚤の市散歩」「商店街散歩」「てぬぐい散歩」「釣り散歩」「花散歩」「プラネタリウム散歩」「山散歩」「海中散歩」「絵本散歩」「謎解き散歩」「ディープ散歩」「孤独な散歩」「霊界散歩」「屋根裏散歩」「ドビュッシー散歩」「見えない散歩」「文学散歩」「俳句散歩」「落語散歩」「百人一首今昔散歩」「演劇散歩」「学校散歩」「散歩の学校」「散歩の達人」などさまざまなテーマがある。

「さんぽ」を実施するプロセスは、事前調査、スケジュール作成、まちあるき実施、情報や素材の編集、デジタル化による公開、となる。このプロセスで図書館の持つノウハウが活かせる。デジタルツールとしては、

- ①電子書籍化（ePub, PDF など）
- ②画像の公開（Flickr, Picasa など）
- ③ブログの活用（はてなブログ, Blogger など）
- ④音声の公開（Podcast など）
- ⑤動画の公開（YouTube, ニコニコ動画など）
- ⑥リアルタイムの動画配信（Ustream, ニコニコ生放送など）
- ⑦SNS の活用（Twitter, Facebook など）

がある。こうして図書館は「まち」や「ひと」の「ものがたり」を形にする仕事ができる。これを「ものがたり化」と呼びたい。その成果のひとつが今回の「お散歩 e 本」である。

(2) 実験事業の目的と概要（豊田）

本事業は「田原市と愛知大学との連携・協力に関する協定書」に基づく、田原市と愛知大学の委託研究契約により、愛知大学に委託したものである。事業の目的は次の 3 点である。

(1) 地域の存在価値を目に見えるようにする。

観光メディアに取り上げられることの少ない地域はなかなか目につかず、インターネットにあっても見つかりにくいのが、電子書籍という形で目に見える形にできる。紙の本を作るのは大変だが、電子書籍なら作りやすい。観光にも学習にも使える。

(2) 地域に密着した新たな図書館の具体的なイメージを示唆する

本といえば紙の本、図書館といえば本がある場所、というイメージを越えて、いろいろな可能性を探る。特に地域資料や郷土資料の収集に加え、これらを出版していくことができる。今回ワークショップという形で人が集まって何か作っていくという、カフェまたはスタジオという機能もイメージできる。

(3) 未来の「司書」教育のモデルを提示する。

司書に求められている役割も変わってきているのではないかと。今回の事業で、図書館情報学を学ぶ愛知大学、皇學館大学の学生が、新しい司書のあり方を学んだのではないかと。

業務は先に述べたとおり、田原市（図書館）が愛知大学（文学部）に委託した。さらに皇學館大学にもご協力いただいた。具体的にはまず、愛知大学と田原市図書館の打ち合わせに基づき、清田・福江両小学校区において、福江市民館の協力を得ながら、愛知大学・皇學館大学の学生によりワークショップを実施した。その結果に基づき、電子書籍を編集・作成した。これは図書館のウェブサイトからもダウンロードできるように考えている。電子書籍は紙の本と異なり、修正も容易である。

(3) 「お散歩」ワークショップ報告（岡野）

ワークショップは、2012年8月24日（金）に田原市清田・福江校区において実施した。参加者計15名の内訳は次のとおり。

皇學館大学（教員1名・学生10名）

愛知大学（教員1名・学生1名）

田原市図書館館長（1名）

福江市民館主事（1名）

ワークショップの目的は、学生に「図書館がまちあるきのイベントに関わること」の意義を考えてもらうこと、観光者としての目線を通して田原市を見ることで、自分の生まれ育ったまちについて も考えるきっかけにってもらうことであった。その結果、学生には、まちそのものやまちに住む人びとが持っている「ものがたり」に関心を持ってもらえた。また、公共図書館がこのようにまちの情報を集めて情報発信することの意義を考えてもらえたと思っている。

当日は皇學館大学の学生は伊勢から電車を乗り継いで田原に到着し、その後バスで渥美図書館に到着した。快晴の真夏日で、暑さには大変苦労した。

「鉄道杭」を見て、もしここまで電車が通っていたら、町はどうなっていたのだろうか、など考えてもらえたと思う。

皇學館大学は日本に2つしかない神道系の大学なので、「畠神社」では学生たちも普段どおりの参拝ができたように思う。伊勢神宮の遥拝所もあり、ここから「伊勢」との繋がりも感じたのではないかな。

それから歩いて「杜国公園」にいった。ここに昔文学者が住んでいたんだな、という昔のできごとを感じ取ることができた。

食事「さんぽ」の一部である。「田原市どんぶり街道」という観光企画をやっていたので昼食にどんぶりをいただいた。

次に「潮音寺」では山頭火の句碑を見た。これもまちなかに点在する文学資料の一つである。ご住職にさまざまなお話も伺った。この寺は、野球選手が修行に来て、いろいろグッズを寄付してくれる。お寺なのに博物館のようである。

その後「火の見やぐら」を見た。今は閉ざされているが、昔はこれを使っていたんだな、ということ考えた。

「古田の港」は、昔は船が沢山来て、そのあたりが繁華街だったようである。それから「須賀神社」に参拝し、当時の繁華街にあった料亭を見学した。

その後市民館で昔のお話をうかがった。

以上で散歩を終わって、伊勢まで帰った。

(4) 「e本（電子書籍）」制作報告（時実象一：愛知大学文学部）

(a) 自己紹介

私はもともと化学の出身で、データベースなどの方からこの分野に入ってきた。主な関心は「アーカイブ」「電子書籍」「ウィキペディア」「著作権」などである。2013/2の「図書館雑誌」に「米国デジタル公共図書館」という紹介記事を書いた。

(b) 電子書籍について

電子書籍は大きく分けて「テキスト」「画像」「PDF」「インタラクティブ」などがある。

「テキスト」電子書籍のはしりは「電子辞書」であり、日本独自のものである。また Kindle Paper White の電子書籍をお見せする。この「ごんぎつね」は青空文庫という、著作権フリーの本を電子化したもので、誰でも使えるので電子書籍では広く提供されている。またこちらは iPad で「吾輩は猫である」を読んでいるところだが、見開きで読むことができる。

「画像」とは本をスキャナなどで電子画像として電子書籍化しているものである。スキャナを使って自分の本を電子化することを「自炊」という。国立国会図書館ではスキャナでなく写真撮影で蔵書を電子化して、現在 45 万件が外部から読むことができる。

雑誌のようなものは、スキャンでなく、はじめから画像として電子雑誌として提供されている。雑誌はレイアウトが重要なので、テキストで提供することが難しい。マンガも同様である。

PDF は主として学術雑誌に使われている。「インタラクティブ」とは絵本でよく使われている方式で、音が出たり、動いたりするものである。

(c) 「お散歩 e 本」の作成と使い方

「お散歩 e 本」はテキストとしては EPUB という電子書籍の形式を使ったものを作成した。EPUB で作成すると、iPad のほかさまざまなところで流通することができる。画像としては bookpic という電子書籍サイトに登載した。

この後、iPad で「お散歩 e 本」の読み方を説明する。iPad の iBooks では、中央をタップするとメニューが表示され、目次に行くことができる。動画が埋め込まれているので、それを見ることができる。畠神社、杜国公園、水琴窟、古田の港、須賀神社、人造石などの動画がある。動画を使うと、音が聞こえたり、アップで近寄ることができる。

bookpic は「美術手帳」という雑誌を発行している出版社が運営している。この電子書籍にはリンクボタンや動画ボタンがある。リンクボタンを使うとホームページにリンクできる。動画ボタンは YouTube にリンクするときなどに使う。また bookpic の特徴は、コメントを書きこんだり、「いいね」ボタンを押すことができたりする点である。

EPUB を作成するのは、HTML を知っている人には難しくない。ただ見る機種によって若干見え方が違う。EPUB を作成すると iTunes などに載せることが可能となる。

(5) 討議「電子書籍が開く地域づくりの可能性と課題」(岡野、時実、満尾哲広：フルライトスペース株式会社、豊田(司会))

(豊田) まずひとりずつ感想をいただきたい。

(満尾) 本年度の明治大学のリバティアカデミーの一部授業の講師を担当し、豊田さんが理事をしている電子書籍図書館推進協議会の事務局メンバーである。また「公共図書館員のためのタマシイ塾」の企画運営委員でもある。

以前千代田図書館が立ち上がる時、当時勤務していた会社にて1年半くらい運営計画や実際の運営を図書館の現場で担当したが、その中で電子書籍導入にもかかわった。その後その会社を離れて独立し、図書館のシステム開発支援、運営のコーディネートなどおこなっている。

なかなか図書館から電子書籍について発信する場がないので、「電子書籍図書館推進協議会」を活用してほしい。今回の報告で印象に残ったのは「きっかけづくり」ということである。まちや地域に来てもらうきっかけ作りは難しい。また継続性の問題がある。アーカイブ的なものは継続が重要である。

(時実) ウェブやブログだと、調査をした生の声を反映しやすいが、電子書籍はパッケージとして、読みやすさを優先して作るので、生の声を切り捨てる場合がある。しかし電子書籍の方がひとの目に触れやすいという特徴がある。両方進めることが好ましい。

(岡野) 豊田さんとは前から知り合っていて、何か一緒にやる機会があればいいと思っていたが、意外に早く実現した。田原という別の町を見て、学生が自分たちの住むまちとの関連性など感じられたのは良かった。継続性については、学生がどんどん変わるが、できれば内容を改善してまた実施できるとよい。電子書籍についてはいつかは自分たちでも踏み込めるとよい。素材としてテキストや絵を描いて、それが電子書籍という成果になったのは、学生にとってよい教育となった。

(豊田) 満尾氏から提起された、継続性・蓄積性について考えたい。今のところ次にどうするかはまだ案を持っていない。今回の事業の目的は、まず田原の皆さんに関心を持っていただくことである。図書館単独ではできない。今回もコンテンツは皇學館大学が作成し、電子書籍化は愛知大学がおこなった。積極的に考えれば、電子書籍という目に見えるパッケージを作るということで多くの人に協力してもらえる可能性がある。これをどう継続的・発展的に進めていくかが課題。次に地域づくりという点について意見を伺いたい。

(満尾) 人によって「電子書籍」も「地域」も捉え方が違う。今回他の取り組みと違うのは、そこにある大学が事業に参画しているところに特徴がある。実は昨日富山にいたが、最終便が出ないので東京に帰れなかった。そのためその前の日にいた北海道立図書館で「MLA 連携による地域アーカイブと共同利用」についての研究会の資料がまだ手元にある。この場と地域アーカイブのいうキーワードの共通項があった。

電子書籍はアーカイブを見るツールとして役立つのではないか。たとえば地域で発行されているチラシなどを集めて書籍化できる。電子書籍というよみやすい形で見えるというのは公開の形としてよい。電子書籍になれば地球の裏側まで紙の本よりも容易に届けることもできる。

(豊田) 電子書籍を地域資源のデジタルアーカイブを可視化するツールとして考えるということですね。

(時実) 地域づくりにはいろいろな手段がある。国立国会図書館で東日本大震災アーカイブ構築プロジェクトをこの3月に公開する予定だが、この場合国会図書館が作るのは検索ページ・ポータル、メタデータである。実際のデータは Yahoo! だったり、YouTube だったり、アメリカの Internet Archive などに分散して存在する。米国デジタル図書館もそのような考えで進めている。図書館でデジタルアーカイブを作成してホームページに載せたりしているが、たとえば動画があれば、YouTube に載せるのが一番広まる。電子書籍もいろいろあるツールのひとつである。

(豊田) 電子書籍は発信ツールのひとつとして有力である。

(岡野) 「地域」とか「まち」については世代間で話題にしやすい。「昔こんなものがあったんだよ」とか、自分が小さいときの写真など、関心を持ちやすい。あるいは地元の人と外から来た人の間でも会話が生まれる。ワークショップをおこなうのは、共通の時間を過ごすという意味がある。古い写真などのようにみんなが関心を寄せてが盛り上がるような資料を掘り起こし、収集してアーカイブしていくことが図書館の仕事として必要になると思う。電子書籍は話題づくりにふさわしい。

(豊田) アーカイブを見やすくするために電子書籍を作り、その電子書籍をめぐって会話が生まれ、そこからまた次の電子書籍ができるとよい。次に、電子書籍をつくり支えていく仕組み、MLA 連携などのようなものについて意見をいただきたい。またこれから図書館で働きたい学生に対する影響、司書教育に対する考え方を伺いたい。

(満尾) 「連携」も大事だが「連動」がより大事ではないか。相手を動かそうと思うと、自分が動かないといけない。そのためには得意分野を活かして。図書館は今まで建物の中で本をナビゲートするのが役割で、その意味では「点」であった。これからは地域という「面」をナビゲートする必要がある。

(豊田) 「連携」から「連動」へというキーワードをいただいた。

(時実) 今回はこのプロジェクトに声をかけていただいて大変感謝している。大学によって違うが、愛知大学の図書館情報のように歴史や伝統のないところでは、何をやっていいかわからないところがあるので、きっかけをいただいた。図書館情報に限らず、大学の先生の力はもっと活用していいのではないか。「司書」ということばがやや「囲い」になっている。最近「文化情報資源」ということばがある。「文化」を保存する機関は図書館だけでなくいろいろある。

(岡野) 他館や他の業界の成功事例をもっと集めて勉強する必要がある。司書教育という点では、私の講演で紹介したメディアセブンなどの例もある。私の授業では、思考実験のひとつとして、まず「本のない図書館を考えてみてください」、という問題を出している。たとえば、「図書館にとっては、建物と本と職員のどれがもっとも重要か」と問いかけると、1年生は建物や本だと応えるが、3年生くらいになると、職員が大事だという学生がでてくる。図書館に本がなければ、職員の立場で自分が積極的に動き、利用者に刺激を与える必要が出てくる。ワークショップやイベントの実施などは、そのために図書館でも活用できる取り組みである。そのための素材として、図書館による電子書籍やウェブの活動にも重要な意義がある。「連携」から「連動」という意見には、思わずはっとするところがある。

(6) 質疑応答

(豊田) 京都からおこしになった、ATR クリエイティブの高橋さんにまずご意見を伺いたい。

(ATR クリエイティブ 高橋) 企業という立場で地域資料を活用するアプリを作らせてもらった。今回の取り組みのすばらしいのは、図書館と大学生が協同でフィールドワークをした点である。電子出版をおこなうというのがフィールドワークのきっかけになっている。このような企画で大学が図書館にかかわったり、企業が連携していったりとできるとよい。「グルメ散歩 e 本」なり、「美術散歩 e 本」なり継続的につくって欲しい。

(豊田) MLA 連携といった場合、図書館とならぶ重要な主体となる博物館の鈴木さんのご意見はどうか。

(田原市博物館副館長 鈴木利昌) 司書とわれわれとの間に「囲い」があるわけではない。博物館の場合入館者がいないとどうしようもない。今年は入館者が少ないので、その対策を考えているが、その点で参考となった。

(豊田) 田原市博物館では「杉浦明平の目」という展示をやっているが、これはまさに文学館的な動きである。

(岐阜市立図書館 岩永) まず今回の事業は館長主導でおこなわれたと思うが、館員のかかわりはどうか、また今回の事業の予算はどうか。たとえば「伊勢ぶらり」の岐阜版を作るには。

(豊田) 渥美図書館の横田が担当したので一言述べてもらおう。

(横田) 「散歩」自体には参加できなかったが、下見など何回も見ている。川崎先生や潮音寺の話もうかがっている。今回文書は皇學館の学生が書かれたが、資料提供や出典を図書館員としておこなった。

(豊田) 予算は政策推進課が担当しているが、田原市と愛知大学の連携事業として本年度は1件につき90万円以下となっていた。その中には報告書作成費用など付随的な費用も入っている。ワークショップなどは設計の仕方で金額は変わる。

(時実) デザインはプロにお払いしている。大学に頼むのはコスト試算も難しい。安くできるがいい先生にあわないとぐずぐずになってしまう。企業に頼むとそんなに安くはできない。

(ATR クリエイティブ 高橋) 90 万以下では難しい。

(時実) 大学を使ったり、必要なところは企業を使うのがよい。ラフなものなら図書館員の片手間でもできなくはない。アメリカなどでも最初はそのように始まったプロジェクトも多い。しかしどこかで片手間からはずさないと、担当者がいなくなったらめちやめちやになる。それは見極めである。

(ATR クリエイティブ 高橋) アプリにするのか、ホームページにするのか、そういうことで費用が違う。

(岐阜市立図書館 岩永) 業者に頼むときは成果物が必要で、きちんと仕様をかく必要がある。

(満尾) 岐阜は新しい建物ができるときなので、そのときにきちんとやっておく必要がある。みなさんシステムには関心があるが、必要なのは仕組みである。いい仕組みがあればやりたい企業がよってくる。

(時実) まさにそのとおりである。システム優先はまずい。

(豊田) 今日は「連携」から「連動」へといういいキーワードが出てきた。博物館の鈴木副館長からもいいお言葉をいただいた。動きのある図書館を作っていくために電子書籍がきっかけになるといい。